

A photograph of a street scene with power lines stretching across the sky. The sky is filled with large, white, fluffy clouds. The street is paved and has a white line on the right side. There are trees and bushes on both sides of the street. The overall mood is somewhat somber due to the heavy clouds.

# エンド イン ワールド

くろん

日付の変わる五分前。誰も見てない電光掲示板に、二〇一二年六月十一日の天気予報が流れている。明滅する一文字一文字が、湿ったアスファルトの表面をオレンジ色に照らし出していた。

十三個のバス停が並んだ駅前のロータリーは、二時間前に最終バスを送り出してから、暗闇の底に眠っていた。電車も終わったのだろう。白い駅舎に人の気配はない。ロータリーを囲むように並び建つ飲食店は、二十四時間営業のファストフード店を除いて、全てにシャッターが降りていた。中には、何年も開けていないような、黒く錆びついたシャッターもあった。

ばちん。大きな音をたてて、蛾が街灯に飛び込んだ。肩がびくりと震え、全身が緊張する。鱗粉をはらはらと降らせながら、焼け焦げた蛾が、目の前のひび割れたアスファルトにぽとりと落ちた。

十三番目のバス停のベンチに座る。緊張した体の力を抜いて、長く、長く息を吐いた。

銅色のベンチは、人間の体のように温かい。さっきまで、誰かが座っていたような温度だ。その表面を撫でて、リュックから、黒い鉄の塊を取り出した。光沢のある金属の筒は、街灯を反射してちかりと輝いた。握るための部分はざらざらと加工されていて、右の掌にしつとりと馴染んだ。

拳銃を握った右手をゆっくりと上げ、こめかみに銃口を押し付ける。ひやりと、鉄が皮膚に貼り付く感触があった。目を瞑る。軽いプラスチックの引き金に人差し指を添わせ、ゆっくり力を入れていく。

かちり。

耳元で、小さな金属音が響いた。

握った鉄の塊の中で、支えを失った撃鉄が落ちて雷管を叩いた。散った火花が火薬に移り、爆発が起こる。弾け飛んだ金属が、まっすぐ銃口へと突き進む。銃身から放たれた弾丸はこめかみに刺さり、脳の底を砕きながら、反対側へと飛び出した。

痛みなんて感じない。ただ、こめかみに針を刺されたような感触が、一瞬あっただけだ。

耳元での爆発音の直後、弾の小ささからは想像もできない量の血と肉の破片が、こめかみに開いた穴から飛び散った。吹き出す血を追うように、身体がぐらりと倒れていく。固く閉じた瞼から、どんどん血の色が抜けていく。

白く、白く。

冷たい風が頬を撫で、思わず目を開いた。目の前には、深夜のバスターミナルが広がっている。文字が流れていく電光掲示板の時計には、2012/06/11/00:01と表示されていた。

ごくりと唾を飲み込んで、喉に詰まった空気を追い出す。座ったままの体の中で、どくんどくと、一定のリズムで心臓が鳴っているのが聞こえた。

冷たい風が背中に染みて、乾いた肺を広げていく。こめかみに傷はなく、ベンチには血の一滴も落ちていない。拳銃は、手の中で冷たく佇んでいた。

生きている。

溜息を吐いて、銃を下ろした。

「ハズレ」

そう呟いて空を仰ぐ。夜中の曇天は、地上の弱い灯りを反射して白く煙っていた。梅雨の明け切らない六月、夜はまだ肌寒い。パーカーのファスナーを上げて、両腕を抱えた。体が小さく震え、指先がひどく冷えていた。

ロータリーの向こうの大通りを、馬鹿みたいに大きなトラックが走り抜けていく。少し遅れて、乱暴なエンジン音が響いた。ロータリーを駆け巡った冷たい風が植え込みを揺らし、色の抜けたツツジの花が、ぽとりと地面に落ちた。

「ねえ」

聞こえてきたのが人の声だと気づく前に、顔の右側が、ぞぞぞと粟立った。弾かれた撃鉄のように顔を上げると、目の前に、女が立っていた。

「それって、本物のピストル？」

いつの間に現れたのだろう。髪の高い女が、アスファルトの上に立っている。白い顔が、にっこりと笑った。淡い色のジャケットとスカートが街灯を反射して、まるで発光しているように見えた。空気の塊が喉に詰まり、声が出ないまま、口がぱくりと動く。

「貸して」

そう言うや否や、女はこちらに大きく足を踏み出した。ヒールの足音が、かつかつと夜に響く。抵抗する隙も与えずに、女は銃を奪い取ると、銃口を自分のこめかみに当てて、ためらいもなく引き金を引いた。長い髪の隙間から、銃口の押し当てられた白い皮膚が見えた。

聞こえたのは、金属が回転する音。時間が止まったような沈黙の後に、甲高い声が響く。

「これ、弾入ってないの？」

女はこめかみから銃を離し、銃口を覗きこんだ。首を傾げると薄い色の髪が揺れ、花のような匂いが漂った。

撃たれたように、額が脈打つ。喉から飛び出しそうな悲鳴を押し込め、一つだけ咳払いをする。

「返してよ」

冷静さを装ったつもりだったが、耳に届いた自分の声は、ひどく震えていた。鳥肌の立った右頬を撫でて、女の手から銃を取り上げる。少しだけ触れた小さな手は、思ったよりも温かかった。心臓がじんじんと鳴るのを聞きながら、銃の弾倉を外し、女によく見えるように銃を掲げた。回転式小銃の弾倉は、金属の留め具をかちりと外せば、簡単に取り外しができるのだ。

「弾は、一つだけ」

六つの穴のうち、銀色の弾に埋められているのは一つだけだ。銃弾は、街灯を反射してきらりと光った。植え込みの奥から、じいじいと、名前も知らない虫の音がする。

「なあんだ」

女は舌を打った。どう反応したらいいのか分からず、もつれる指を抑えこみ、安全装置をかけた銃をリュックにしまった。浅い呼吸を繰り返す、腹に詰まった混乱を吐き出そうと努力する。それが効果的だったのかは分からないが、とりあえず、いつもの声は出るようになった。

「何してるの」

他に言うべきことがある気もするが、乾いた喉の奥深くから、最初に出たのはこの言葉だった

。「こんな時間に、こんなところで、もうバスないよ」

同じことを自分に聞かれても答えられないけれど、最も一般的だと考えられる問が、するすると口から溢れる。女はきゅっと口角を上げ、わざとらしい笑顔を浮かべた。

「私、何も覚えてないの」

なあーんにも、と強調するように言って、女はこつんとハイヒールの爪先を鳴らした。ジャケットとタイトスカートという格好は、仕事帰りの大人の女という雰囲気だ。手首にはヘアゴムがかかっている、仕事中には髪をきゅっと結っている姿が簡単に想像できた。

「はあ？」

思わず声を上げ、眉をしかめる。だけど、笑っている女の顔に視線が辿り着く前に、はたと呼吸が止まった。

女の白いジャケットに、赤い汚れがついている。その色は、銃弾にえぐられた額から流れ出る液体によく似ていた。ぼんやりとした街灯と、電光掲示板のちかちかとした光しかないこの場所でも、見間違はずがない。

血だ。

おずおずと顔を上げると、女は相変わらず笑っている。バラエティ番組に出てくる女性アイドルのような、作り上げられた自然な笑顔だ。

目が合うと、女は肩をすくめた。

「これ、血だよね」

女は左手でジャケットの右袖を持ち、ぴんと張った。右袖を中心に、ぱつと散らした血飛沫は、鮮やかに赤い。

「私、誰かを殺しちゃったのかな？」

スキップするような明るい声が、湿った暗闇を割った。目の奥で心臓が鳴る。こいつ、やばい。頭の中に、そんな直感が走った。

女は長い髪を揺らし、こちらに背を向けた。女の輪郭がぼんやりと浮かび上がり、毛先だけがきらきらと輝いている。宙に浮いているような現実感のなさに、目の前が白く光る。

「君は、何してるの？」

声と同時に、女は勢いよく振り向いた。長い髪が、大きく円を描く。シャンプーのCMのような光景に、思わず息を飲んだ。頭が真っ白になり、女の間で答えられない。だけど、頭が正常に働いていても何も言えなかつただろう。何をしていたわけでも、何をするつもりもない。

女は人差し指をついと伸ばし、こちらの額に触れた。そして、きつと眉を吊り上げる。尖らせた唇は、濡れたように赤かった。押しえられた額から、女の体温が伝わってくる。春先の雨のように、生暖かい指だ。

「君、高校生でしょ？こんな時間に出歩いてたら、親が心配するよ」

説教するような口調が、静まりかえったターミナルにひどく不似合いだった。背中を逆向きに撫でられているような不快感が全身を走り、女に触れられた額に集まって、消えた。

女は突然、腹を押さえて笑い始めた。文字で書くような「ははは」という笑い声だ。胃を握られ

たように、身体がびくりと跳ねた。

「なあんてね、なんて、冗談。君もわけありでしょ。もしかしたら、私よりずうっと」

女は、傍らに置いたリュックを指さした。中には拳銃が入っている。この拳銃は疑う余地もなく本物だし、銃身には、まだ火薬の匂いが残っている。

女はひとしきり笑うと、ふうと息を吐いた。

「外は寒いね。そこのホテル、一緒に入ろう」

女性にホテルに誘われるという状況に、文脈を無視して心臓が高鳴る。そんな場合かと、自分を殴りたい衝動に駆られたけれど、体は動かない。

女が指さしたのは、駅の隣にそびえ立つビジネスホテルだ。こんなに寂れた地方都市で、需要があるのか、経営は大丈夫なのかと疑問になるほど大きくて、立派な建物だった。大きな一枚の石の看板に、ホテルの名前が刻まれている。

「行こう」

女はこちらに近づくと、突然手を握った。ぐいと手を引かれ、思わずベンチから立ち上がる。女は満足そうに頷くと、こちらに背を向け、さっと歩き始めた。

細い指に、強く掴まれた手が痛い。手をさすりながら、遠ざかる女の背中を眺める。そのまま霞のように消え去ってくれることを期待したが、女はくるりと振り向いて、笑顔で手招きした。

「ほらあ、行くよ」

どうやら彼女にとって、一緒にホテルに入ることは決定事項らしい。逃走を許さない目で、こっちを見ている。

夜中とは思えないほど眩しい笑顔が、目に刺さって痛かった。両手で目をぐいぐいと擦ってから、ようやく足を踏み出した。

女は、血で汚れたジャケットを脱いで腕にかけ、後ろ暗いところなど何一つありませんという顔をして、ホテルに入った。予約もしていないし、こんな時間の飛び込み客だけど、チェックインはするすると済んだ。彼女は、こういう事態に慣れているのだろうか。鍵を受け取り、かつかつとハイヒールを鳴らして廊下を歩く後ろ姿は、まさに大人の背中だった。その背中に黙ってついていく自分が、一体何に見えるのか分からなかったが、とりあえず、大人しくしておいた。

「ああ、意外に綺麗な部屋！」

女はそう声を上げてツインルームの部屋に入ると、ハイヒールを脱ぎ捨てベッドに飛び乗った。両手両足を投げ出して、しばらくベッドの柔らかさを堪能すると、思い出したようにぱっと体を起こし、唯一の荷物であるショルダーバッグを逆さにして、中身をぶちまけた。

ぼとりぼとり、ばらばらばらと、白いシーツに荷物が飛び散る。財布と化粧ポーチ、日焼け止めと喉飴とボールペンと、よく分からない細かいもの。バッグが空になると女は財布を開けて、お札やカードを取り出し、一つ一つ並べていった。最後に取り出した免許証を見つめ、女は首を傾げる。

「これ、私？」

女はそう言うと、免許証をこちらにぐいと差し出した。そんなものを見せられても、そんなんじゃないのとはか言えない。免許証の写真は、目の前にいる女よりは素朴な雰囲気、少し若く見えたけれど、本人であることに間違いなかった。

女の名前は、<sup>かなめ まさみ</sup>鹿目雅美。生年月日は二十九年前だ。

頷くと、雅美は不服そうに唇を尖らせた。そして免許証を財布に戻し、バッグに叩きこむ。

「鹿目雅美、鹿目雅美ねえ、普通の名前だなあ」

十中八九自分のものである名前に対して、ひどい言いようだ。雅美はバッグを投げ出して、テレビの前のリモコンを手を取った。

「この時間じゃ、ニュースやってないか」

日付が変わって三十分。テレビの小さな画面は、お笑いか音楽か、アニメかスポーツしか映し出さない。全てのチャンネルを二周して、雅美はリモコンを放り出し、ベッドにごろりと寝転がった。無防備過ぎるスカートの裾は、ほんのすこし視線を向ければ、中身が見えてしまいそうだった。

雅美を見ないように気をつけながらリモコンを拾い、芸人がひな壇で大笑いしているテレビを消した。代わりに、ベッドサイドの棚に埋め込まれた、ラジオの電源を入れる。照明を調節するダイヤルと似た形のダイヤルを回し、じわじわと選局する。

「六月十日未明、田宮市内在住の会社員、<sup>のなかよしゆき</sup>野中嘉之さん宅から、三名の遺体が発見されました」

あるポイントにはまった瞬間、ノイズにまみれた感情のない声で、アナウンサーがニュースを読み上げた。遺体というキーワードに反応したのか、雅美はがばりと起き上がった。

「発見された遺体はこの家に住む野中嘉之さん、<sup>みちこ</sup>美智子さん、<sup>りひと</sup>次男の理仁さんであると確認されました。遺体には銃で撃たれたような傷があり、犯行に使用された凶器は発見されていません」

雅美はうつ伏せになって、ニュースを聞きながら足を揺らす。

「これ、私かなあ」

どうやら、雅美は本当に記憶喪失らしい。自分が何者なのか、何をしていたのか覚えていないまま、気がついたらあのバスターミナルにいたそうだ。ジャケットについての赤い染みは、蛍光灯の下でも血に見えた。雅美に怪我はないので、他人の血なのだろう。

雅美によると、彼女は誰かを殺して逃げてきたらしい。それだけは自信があるけれど、誰をどうやって殺し、どこを通過して田宮駅に現れたのか、全く思い出せないそうだ。そんなことを簡単に忘れられるなんて、とても信じられないけれど。

「俺だよ」

湿った声に、アナウンサーが新たな情報を重ねた。

「警察は、連絡が取れなくなっている野中さんの長男、野中<sup>のなか</sup>弥<sup>やえ</sup>栄さんが何らかの事情を知っていると  
して、捜索を行なっています」

雅美は、へっと間抜けな声を上げた。そして、ラジオとの間で視線を彷徨わせる。

「野中、弥栄くん？」

指差す雅美に、深く頷く。雅美は体を起こし、ぐっと顔を近づけてきた。化粧をしているようには見えないけれど、粉っぽい匂いが鼻孔をくすぐった。鼻をすすって、唾を飲み込む。

「俺が、野中弥栄だよ」

名前を言っただけなのに、喉の奥がひりひりと痛んだ。

俺が、野中弥栄。父親である野中義之、母親である美智子、兄弟の理仁を殺した、野中弥栄だ。

「へえ、じゃあ、殺人犯で、逃亡犯なんだ」

目と鼻の先で目を丸くした雅美に、弥栄はもう一度頷いた。雅美は「ほお」と感嘆の声を上げながら、ベッドの上であぐらをかいた。

「派手だなあ、両親と、弟くんを殺したの？そんなことしたら、他の事件が霞んじやうじやない」

そうでもないよと、弥栄はぼつりと答えた。

高校生男子が両親と兄弟を殺して逃亡していると、最初に報道されたのは、今日の朝だった。トップニュースではあつたけれど、ニュース番組の丸ごとが弥栄の話になったわけではなかった。弥栄は今日一日、携帯電話のテレビで色々なニュース番組を見ていたけれど、アナウンサーが弥栄の話をしたのはほんの一瞬だった。尖閣諸島がどうのとか、デモがどうとかいう話の方が、ずっと多かった。

日本では、毎日誰かが死んだり殺されたり襲われたりしていて、弥栄の事件もその一つに過ぎない。高校生が家族を射殺し逃げるという事件は、インパクトは十分だろうけど、ラジオのアナウンサーは、次の瞬間死んだ人など世界に誰もいないような声で、芸能人の結婚の話 시작했다。

「じゃあ弥栄くんは、逃げてるところだったんだね」

弥栄は頷いたが、ふと首を傾げた。事件現場である家から離れはしたけれど、逃げているつもりはなかった。行くあても、したいこともなかった。黒いリュックには三日分の着替えと原付の

免許と、家中からかき集めた現金が十七万円入っている。新幹線の運賃程度にはなるだろうけれど、その後の計画は何もなかった。

「私も、そうなのかな。新幹線で逃げようとしてたのかも」

ホテルの目の前にある大田宮駅は、関東の隅のこの県で、たった一つの新幹線が停まる駅だ。県境住みでもない限り、急いで県外に逃げるなら、当然ここに来ることになる。だけど、弥栄が駅に着いたのは、二十二時五十四分の最後の新幹線が出てしまった後だった。鈍行はまだ走っていたけれど、一時間半かけてバスを乗り継ぎ駅にたどり着いた弥栄は、これ以上、狭い席に座っている気になれなかった。どうしようかとぼんやり考えている間に鈍行の最終電車も出てしまい、弥栄は、しかたなくバス停のベンチに座っていた。ここで眠ってしまおうかと考えていた時に、血しぶきを浴びた雅美が現れたのだ。

ラジオが天気予報を読み上げる中、雅美はベッドで仰向けになり、腰を浮かせてスカートのファスナーを下ろした。じっと、金属の音が響く。弥栄は慌てて目を逸らし、ベッドサイドのラジオを止めた。雅美は弥栄の動きに気づいた様子もなく、脱いだスカートを床に落とした。弥栄はいたたまれなくなって立ち上がり、どうしようもなく、テレビ台に手をついた。背後で響く衣擦れの音は止まらず、雅美は順調に服を脱いでいるようだった。

雅美はどんな服を着ていただろうと、考えるつもりもないのに頭に浮かぶ。血のついたジャケットの下は、VネックのTシャツだった。それとスカート、ストッキング、それから。

「弥栄くん、そこ、目の前に鏡があるよ」

えっと顔を上げると、テレビの奥の壁は、大きな鏡になっていた。テレビ台と鏡台を兼ねているのだろう、コンセントにつながったドライヤーが壁にかけられている。

鏡は確実に、背後のベッドと、その上の女を映し出していた。かっとな顔が熱くなるのを感じ、弥栄は慌てて、鏡と反対側に目を向けた。壁には、水彩絵の具で描かれた小さな花の絵が飾られていた。

女の笑い声が、ベッドの上で爆ぜる。

「やだあ、かわいいー、着てる着てる、服着てるわよ」

振り向くと、雅美は備え付けの浴衣を着ていた。白地に紺の模様が入った安っぽい布を、前の紐で結び合わせている。けらけらと笑う雅美の首筋が白くて、弥栄は結局目を逸らした。

「殺人犯でも、普通の男の子だねえ。耳、真っ赤だよ」

うるさいと、呟いた声が掠れた。喉の奥が、まだぼくぼくと鳴っている。

「私、寝るね、お休み」

雅美はそう言って、ばさりと薄い布団を被った。取り残された弥栄は、深く溜息を吐いた。

どうしてこんなことになったのだろう。この女は誰で、どういうつもりでここにいるのか、これから何をするつもりなのか、弥栄には想像もできなかった。記憶喪失だという雅美の言葉を、信じていいのかも分からない。

白い布団から、雅美のふくらはぎがはみ出ていることに気づき、弥栄は思わず唾を飲み込む。白い肌は毛が一本も生えておらず、しっとり滑らかそうに見えた。弥栄は慌てて頭を振って、隣のベッドに寝転がる。部屋の照明を消して、さっと布団に潜り込んだ。



人を殺してから、まだ二十四時間経っていない。そんな人間が、突然目の前に現れた正体不明の女に対して、どぎまぎしている場合ではないだろう。

弥栄は目を固く瞑る。人を殺した罪悪感や、混乱や切迫感や興奮はないのかと、弥栄は必死で自分の頭を探ったが、白い布に包まれたような、名前のないぼんやりとした感情しか見つからなかった。

雅美は、とっくに寢息を立てていた。隣のベッドから漂う甘い匂いが気になって、弥栄はいつまでも眠れなかった。

薄暗い部屋で目を覚ました弥栄は、寝転がったまま手を伸ばし、ベッドサイドのダイヤルを回した。じわりと灯る照明が、ゆっくりと部屋を照らしていく。ラジオの隣の電子時計は、朝の五時五十分を表示していた。ブラインドの向こうに覗く空は、紺色に白が流された、朝の色をしていた。

弥栄は起き上がり、冷えたテレビのリモコンでニュース番組を探した。こんな時間に、テレビをつけるのは初めてだ。いつも見ているニュースの簡易版のような、あっさりとしたスタジオに、どこかぼんやりとした顔のアナウンサーと、眠くてテンションが逆に高くなっている女子アナが並んでいた。

ぼちぼちとチャンネルを変えて、三つ目でやっと、目的の風景を見つけた。見覚えのある建物が、画面に大きく映し出されている。生まれてからずっと住み続けてきた、弥栄の家だ。住宅街の真ん中の一軒家が、黄色と黒のテープに包囲されている。分かってはいたけれど、心臓がずきりと痛んだ。

画面がスタジオに切り替わると、黒縁眼鏡のコメンテーターが、寝ぼけたような顔で声をあげた。田宮市で両親と息子が殺され、もう一人の息子が行方不明だと、昨日の時点で分かっていたことを繰り返し、それについて何の言及もないまま、ぬるりと次のコーナーに移った。コメンテーターの表情も、目が覚めたようにがらりと変わる。ゲストに女優が呼ばれ、映画の宣伝が始まった。

弥栄は首を傾げ、溜息を吐いた。首筋と背中がぱきりと音を立て、少し痛む。慣れない布団で寝たせいか、昨日ずっとバスの小さな座席に収まっていたせいか、全身が固く凝っている。弥栄は肩をぐいぐい揉んで、腕を回した。それでも、筋が伸びたような気もしなかった。

弥栄は、リュックから拳銃を取り出した。弾が一発、きちんと入っていることを確認し、くるくると弾倉を回す。テレビ画面の中で、ゲストとして呼ばれた女は歌手だったようで、脈絡もなく、座ったまま歌い出した。

弥栄は、回転させた弾倉を銃身にはめ直す。手の中でかちりと音を鳴らして、流れるように安全装置を外す。こめかみに銃口をあて、引き金を引いた。金属の外れる音が、小さな部屋に響く。

そして。

「ロシアンルーレット？」

弥栄は、はっと振り向いた。雅美がベッドの上で膝を抱え、こっちを見ていた。渦を巻いた髪が、ベッドサイドの灯りを受けて、茶色く輝いている。長い睫毛が、頬に影を落としていた。

そう言えば、いたんだ。喉の奥がぴくりと動いたが、思ったのとは別の言葉を、弥栄は口先で作った。

「やってみる？」

安全装置をかけないまま、引き金から指を外して、弥栄は銃身を雅美に向けた。拳銃を撃つ時以外は引き金に指をかけてはいけないと、昔見た海外ドラマの警察官が言っていたような気がする。

「やめとくね」

雅美は、肩をすくめて笑った。

「それ、本当に、本物なんだ？」

頷いて、弥栄は拳銃をリュックにしまう。この拳銃は本物だ。親兄弟を撃ち殺した金属は、確かにここから発射された。

「弾、一発しか入ってないの？」

弥栄は頷く。父親、母親、兄弟に一つずつ弾を使って、残ったのは自分の分だ。雅美はつまらなさそうに唇を尖らせた。

「たった一個の銃弾を、自分なんかに使っちゃうなんて」

テレビは、もう弥栄の話なんてしていない。画面には、中年の男性アナウンサーが、口角泡を飛ばす勢いで話している姿が映しだされていた。よく聞いてみると、消費税が上がった時の生活がどうなるのか、色とりどりのパネルを並べて、現実的なのかも分からないシミュレーションを行なっているようだった。弥栄の生活に影響するとしたら、学校帰りの買い食いが数十円高くなるくらいだろう。小遣いも減るかもしれない。そこまで考えて、弥栄は思わず鼻で笑った。学校に行ったり小遣いを貰ったりする生活に、戻れるわけがない。

雅美はベッドから下り、弥栄が放置したテレビのリモコンを取った。ちょうど六時になり、全てのニュース番組が仕切り直されている。雅美は、さっきの弥栄と同じように、ぽつぽつとニュース番組をザッピングした。六番組中、三つのトップニュースが弥栄だったが、もう半分はばらばらだ。高校生が家族を殺して逃げた事件より、芸能人のこじれた離婚裁判の方が重要らしい。

「殺人事件って、結構あるのね」

雅美は、山道に放置されていた車から女の遺体が発見されたというニュースを眺め、言った。確かにそうだ。弥栄も当事者になってから初めて気づいたが、テレビでは、毎日新しい殺人事件が報道されている。人間がみっちり詰まった社会では、殺人事件の話なんて、掃いて捨てるも湧いてくるのだろう。

「私がやったの、強盗じゃないよね。荷物これだけだし、泥棒でもない」

記憶を失ったと言う雅美は、自分が殺した人間を探しているようだった。昨日一日で一歳にもならない子供が虐待で死に、寝たきり老人が絞め殺され、中学生がマンションの屋上から落ち、女子大生が道端で乱暴されたらしいが、全て犯人が捕まっていた。殺人や傷害の事件で犯人が捕まっていないのは田宮市一家殺害事件だけで、その犯人は、今ここでテレビを見ている。

雅美はテレビを消し、何も言わずに風呂場に向かった。すぐにシャワーの水音が響き始めたので、弥栄は大きく伸びをした。

さすが高級ホテルとでも言うべきか、部屋にはパソコンが備え付けてある。部屋に置かれているホテル使用の注意書きのファイルに、ログインパスワードが書かれた紙が挟み込まれていた。強固なフィルターがかかっているが、一般的なウェブサイトなら見られるようだ。

弥栄はまず、今シャワーを浴びている女の名前、「鹿目雅美」を検索した。テレビで報道されなくても、事故か事件で行方不明なら、ネットニュースくらいにはなっているだろうと思ったからだ。だけど、何にも引っかけられない。同じ名前のSNSやブログならあったけれど、どうやら全

くの別人のようだ。

もしかしたら、彼女の犯行はまだ明るみに出ていないのかもしれない。弥栄はそう考えながら、検索結果が表示されている白い画面をスクロールした。計画的な犯行で証拠を跡形もなく消し、最後の仕上げに新幹線で逃げようと駅に来たところで、運悪く記憶喪失になってしまったとか、そんな可能性も考えられる。

それとも、単純に頭のおかしい人間だろうか。例えば、病院や家に閉じ込められていたのに、何のきっかけで抜け出してきてしまったとか。頭がおかしいから、人を殺したという妄想に取り憑かれているのだ。だけど、その場合、どんな検索を行えばいいのか、まるで見当がつかない。

溜息を吐いて、弥栄は自分の名前を検索する。雅美と違って、検索結果には大量のニュースサイトが並んだ。巨大な匿名掲示板にも幾つかのスレッドが立っていて、名前も顔写真も学校も学年クラス出席番号も、前回の中間テストの結果も、全て晒されていた。書き込んでいる人の中にクラスメイトや友達もいるのだろうと思うと、不思議な気分になる。たった一発の銃弾で、自分が人間ではなくコンテンツになってしまったような。夢の中で空を飛んでいる時の、妙に脱力した感覚に似ている。

「それ、ネット繋がってるんだ」

湿気を含んだ熱い空気が、弥栄の背後に立った。振り向きかけて、弥栄はぐっと画面に目を戻す。無理な動きをした首筋が、みしりと音を立てた。

視界の端をかすめた雅美は、白いバスタオルを巻いただけの姿だった。こいつは馬鹿かと、弥栄は平静を装って適当なニュースサイトをクリックする。白いマウスの上で指が震え、掌が湿った。もしかしたら、雅美はタオルの下に服を着ているかもしれない。だけど、確かめる勇気はなかった。そうでなかった時、どんな顔をしたらいいのか分からない。

「私っぽい事件、ある？」

雅美の気配がするりと弥栄から離れ、冷蔵庫を開けた。缶の炭酸飲料を取り出し、ぐびりぐびりと飲んでいく。私っぽい事件というものが何を指すのか分からないが、弥栄はニュースサイトのトップに並ぶ、注目の事件を読み上げた。

「いじめの中学校に爆破予告、二級建築士が一級になりすまし、地方議員が当て逃げ、原発デモに一万名、生レバーで食中毒、尖閣諸島に強制上陸」

「弥栄くん、適当に読まないで」

雅美は中身を飲みきって空になった缶を、音を立てて冷蔵庫の上に置いた。行為の端々が、大きくてがさつだ。昨日は多少動揺したけれど、落ち着いてみると、そこまでどぎまぎする必要はないように思えた。少なくとも、一般的な少年が夢見るような、魅力的な大人の女だとは思えない。美人と言えば美人だが、それが全く生きていない。姉がいたら、こんな感じなのだろう。弥栄はちらと後ろを見る。雅美はベッドの傍に立ち、浴衣の前を合わせていた。

「あんたっぽい事件って、殺人か傷害だよな。ええと、タクシー運転手刺殺は岐阜。スナック経営者殺されるってのは、犯人捕まってるし……。ストーカーで母娘襲撃、ストーカーなら犯人は男だよな。川に幼児の水死体は、溺死なら血は出ないか」

ぼすんと、雅美の身体がベッドに落ちる。振り向くと、雅美はベッドの上をごろごろと転がっ

ていた。

「ああ、もー、全く身に覚えがない！」

記憶喪失なら当たり前だ。雅美は起き上がり、弥栄の背後に立ってマウスに手を伸ばした。弥栄は慌てて手を引くが、一瞬、雅美の熱い手が触れた。弥栄が引いた肘を華麗に回避した雅美が、喉の奥でふふふと笑う。思わず口を開いたけれど、悔しいので、弥栄は何も言わなかった。

雅美は弥栄の背中にもたれかかるようにして、画面を眺める。

「私が思うに、撲殺なのよ。気がついた時、右手がじんじんしたの。血だって、右袖中心にかかっていたでしょ？右手で、何か固いものを持って殴ったんだと……」

雅美は右手の中指でくりくりとマウスを操作し、ページをスクロールしていく。洗いたての髪が弥栄の頬に落ち、背中に柔らかい肉がぶつかった。心臓が全身で鳴った。

「やっぱり、トップニュースは弥栄くんばかりだ」

弥栄の肩に、柔らかい雅美の腕が当たる。このホテルに備え付けられている石鹸の匂いが、弥栄を包んだ。男子が一度は憧れる、無自覚にエロい姉に絡まれている状況に酷似しているけれど、今は、こんなもの望んではない。

「絶対に、殺したと思うんだけどなあ」

記憶喪失なのにどうしてそんな自信が持てるのか、弥栄には分からない。ニュースになって、日本中の人に家族三人を殺したと言われ続けている弥栄でも、まだ実感を抱けていない。自分の人差し指が放った金属が、家族の額を貫いたなんて。

弥栄は思い切って息を吸い、ぱっと立ち上がる。雅美が、わっと声を上げて飛び退いた。弥栄は手を振ってスペースを確保すると、「危ないじゃない」と声を上げる雅美に目も向けず、風呂場に向かった。

雅美が使った直後の風呂場は、まだ白い湯気が残っていた。石鹸の甘い匂いにどきりとするが、だんだんとそれにも慣れてきた。雅美に対して動揺しているのではなく、慣れない女性の気配に反応しているだけだ。共学高に通っているけれど、こんなにいい匂いのする人間には会ったことがない。弥栄は目を擦って、自分を落ち着かせた。

風呂には、シャンプーもボディソープもリンスもタオルもカミソリも、全部揃っていた。シャワーを済ませ体を拭いて、弥栄は、ふとI字のカミソリの白いビニールを切った。そして、そっと手首にあてた。ひやりと、薄い刃の感触が皮膚に走る。その下で、ぴくぴくと血管が動いていた。赤い血が流れているはずの血管は、皮膚の下で青く見えた。

「そういうんじゃ、ないんだよな」

弥栄はぼつりと呟いて、手首からカミソリを離した。銀色の刃は薄皮一枚傷つけることなく、白い洗面台に舞い戻った。

ぼんやりと目を開くと、部屋に染み付いていた煙草の匂いが鼻に刺さった。禁煙ルームではないから、きっと前の客のものだろう。白く霞んだ視界がはつきりするにともなって、鼻が匂いに慣れていく。目を擦る頃には、全く気にならなくなっていた。

同時に、二人はもさりと起き上がる。六時過ぎから二度寝して、九時前に目が覚めてしまった。どちらが先に起きたのかも分からないまま、二人はだらりと着替えた。ホテルのカフェで朝食を食べ、何事もなくチェックアウトする。ロビーには早くも仕事を始めたようなスーツの男が数人、パソコンを叩いていた。

雅美は、ジャケットの血を首に巻いたストールで上手く隠し、かつかつと自動ドアをくぐった。「服が買いたい」

外に出た瞬間、雅美が声を上げた。六月の空はじつとりと曇っていたが、雨は降っていなかった。

「血のついた服なんて、気持ち悪い」

雅美は、弥栄の返事も待たずに歩き出した。

大田宮駅の隣には、巨大なショッピングモールがある。ララ何とかという名前だが、壁に書かれたアルファベットはきつくアレンジされていて、初めて見る弥栄には読めなかった。五年前にこれが完成したせいで、近くのアークード商店街では客が激減し、シャッター街になっているらしい。弥栄の行動圏からは完全に外れている場所なので、よく分からないけれど。

雅美は、振り返ることなくララに向かう。その背中を眺めながら、弥栄は足を止めた。雅美と一緒にいる必要は、どこにもない。新幹線に乗って、どこか遠くに行ってしまうか。眩しいララの黄色い壁に押しつぶされそうな駅舎の前には、何人もの人間が歩いていた。

「弥栄くん、早く一、弥栄くーん？」

雅美の甲高い声が、ロータリーを走った。耳を殴られたような衝撃を感じ、弥栄は雅美に駆け寄る。そして、雅美の肩を叩いた。

「あんた、馬鹿じゃないの」

ほんの数メートル走っただけなのに、弥栄の息は上がっていた。雅美は、きょとんと音が聞こえそうな表情を浮かべ、弥栄を見ている。雅美はハイヒールを履いているが、視線の高さは弥栄とほとんど同じだ。長いまつげが、ぱさぱさと音を立てていた。

「俺の名前は、ニュースに出てんだよ」

リュックの中で、拳銃が背中にぶつかる。がちんと、背骨に当たった金属が鳴った。雅美は「ああ」と声を上げ、納得するように頷いた。

「ごめんごめん、じゃあ行こう、弥栄くん」

雅美は朗らかに言った。わざとなのか、馬鹿なのか分からない。弥栄は額を押さえ、かつかつと歩く雅美のあとを歩いた。

雅美は汚れたジャケットを腕にかけ、スキップでもするように、軽やかにララの自動ドアをくぐった。弥栄は建物に入り、ドアの目の前の、大きな柱の前で足を止めた。案内板を見る振りをして、遠くに広がるララの内部に目を細める。入ってすぐに大きなディスカウントストアがあり

、その向こうにドラッグストアが見えた。大きな棚が、天井まで敷き詰められている。

雅美は、まっすぐエスカレーターに向かっていった。弥栄は少し迷ったけれど、その後を追った。二階に上がると、ふわりと甘く、粉っぽい匂いが漂った。雅美からするものによく似た、胸に詰まる甘い匂いだ。女性服のフロアには、教室を半分にしたくらいの小さなテナントが、きゅうきゅうと敷き詰められていた。弥栄は軽いめまいを感じて額を押さえる。店の一つ一つが、あまりにも小さい。

弥栄は生まれも育ちも田宮市で、服でも靴でも生活必需品でも、国道沿いにある複合商業施設で買っていた。そこは小学校と中学校と高校をまとめたくらいの、広大な敷地面積を誇っていた。幼い頃は家族で行って、一日中をそこで過ごしたりもした。食料も服も本もおもちゃも電化製品も何でも売っていて、フードコートがあって映画館があって、屋上にゲームセンターを兼ねた遊園地まであった。土地が余っているせいなのか、一つ一つの店はとても広く、全てのものが揃っていた。その分、周りには何もなかった。

ララは、その小さなテナントの一つ一つに、売りたいものだけを詰め込んでいた。弥栄には欲しい物もない。弥栄は雅美の背中を見失わないようにしながら、ゆっくりと歩いた。雅美は弥栄を一度も振り返らずに、二階と三階を忙しく動きまわった。雅美は予算なんか気にもしない様子で全ての店を巡り、手当たり次第に買い込んでいく。弥栄が遅れても、はぐれそうになってもお構いなしだ。

弥栄は、ついに雅美についていくのを諦め、エスカレーター前のベンチに座った。

「はい、コレ」

ベンチに腰掛け、膝に頬杖をついていた弥栄の頭に、ふわりと何かが被さった。顔を上げると、つばが作った影の向こうで、雅美がにっこりと笑った。帽子だ。オレンジ色のキャスケットは、絶対に自分では買わない色だった。

「気休めかもしれないけど、顔隠し」

雅美は、大きな革張りのスーツケースを引きずっていた。すぐに使うからと、タグを外して貰ったのだろう。他に荷物は持っていない。きっとスーツケースの中だ。

雅美は長い髪を結い上げ、淡いピンク色のシュシュをつけていた。表情が晴れやかに見えるのは、化粧を直したからだろう。弥栄が雅美から目を離していたのは三十分ほどだが、雅美は、別人のように綺麗になっていた。

こんな派手な買い物、目立つだろうな。弥栄は自分を棚に上げて、ぼんやりと思った。平日の昼間からララのベンチにぼんやり座る少年と、派手な買い物をする雅美の、どちらがより印象に残るだろう。弥栄は、雅美がくれた帽子を深く被り直した。

「お腹空いたね」

雅美はそう言い、弥栄の手を引いた。思わず立ち上がってしまったので、弥栄は仕方なく雅美を追った。エレベーターを乗り継いで、一番上の階に降り立つ。狭いフロアに並び立つレストランから無難な洋食屋を選んで入り、奥の白いテーブルについた。平日の二時過ぎに、他の客の姿はなかった。

弥栄は、家を出てからファストフードのハンバーガーと、コンビニのメロンパンしか食べていな

いことを思い出した。弥栄の胃に一瞬で体液が溢れ、喉の奥がきゅると鳴った。弥栄は衝動的に、ダブルチーズのミートソーススパゲッティという、油を摂取するためだけの料理を頼んだ。運ばれてきた白い皿の上で、赤いソースで煮こまれた肉に、溶けたチーズが絡まっていた。

「弥栄くんは、これからどうするつもり？」

ペペロンチーノをフォークで巻きながら、雅美が言う。弥栄は皿をあっという間に空にして、アイスコーヒーのグラスにストローを入れた。

「どうって」

「自首するとか、逃げるとか」

雅美は、今更ながら声を潜める。店の中にはおぼさんの店員が一人しかいなくて、ぼんやりとお冷のグラスを拭いていた。こちらの声が聞こえる距離ではない。弥栄は頬杖をついて、普通の声量で返事をした。

「何も考えてない」

弥栄は、アイスコーヒーにガムシロップを入れる。じわりじわりと沈んでいく透明な液体をストローでかき回すと、溶けかけた氷が、からりからりと鳴った。雅美は考えるように俯いて、ぱっと顔を上げた。

「じゃあさ、そのピストル、私に出来ない？」

「嫌だよ」

即座に答えた弥栄に、笑顔の雅美は目を丸くする。

「使う予定あるの？」

弥栄は右手の人差し指を立て、こめかみに添えた。そして軽く弾き、発砲のジェスチャーをする。

「毎日やるから」

ロシアンルーレットだ。一発だけ弾を込めた、回転式小銃がないとできないこと。弥栄が答えると、雅美は拗ねたように唇を尖らせた。

「弾、一個しかないの？」

弥栄が頷くと、雅美は頬杖をつき、投げやりな口調で続ける。

「じゃあさ、弥栄くんが死んだら、拳銃だけもらっていい？」

はっと思わず声を上げると、弥栄の口からストローが落ちた。詰まった氷に導かれ、白地に赤い線が入ったストローが、グラスの底にこつんと沈む。

「当たった後じゃ、弾がないよ」

「自分で何とかする。本体手に入れるより、簡単でしょ」

馬鹿なことをと、弥栄は雅美を見返す。雅美は、まっすぐ弥栄を見ていた。太く黒々としたまっげが、目を縁取っている。大人に、しかも女性に正面から見つめられる経験なんてなくて、弥栄は思わず目を逸らした。テーブルについた雅美の両手は、少しも動く様子がない。

弥栄は、しかたなく頷いた。雅美はやったあと声を上げる。

「じゃあ、弥栄くんが死ぬまで逃げ続けなきゃ。大丈夫、私も手伝ってあげるから」

明るい声で言った後、雅美は伝票を持って立ち上がる。当然のように雅美が二人分を払い、すりと店を出た。記憶がなくても、自分が大人であるという自覚はあるらしい。弥栄は溜息を吐



いて、拳銃の入ったリュックを担ぎ直した。

レストランフロアの十階から地道にエスカレーターを降りて、二人は、ジュースでも買おうと地下の食料品売り場に向かった。クーラーが弱くかかっている、ララの中の空気はひどく乾燥していた。

弥栄は、ふと足を止めた。スーパーに降りるエスカレーターの前に、広めの休憩スペースがある。そこには三つのベンチと、テレビが備え付けられていた。

誰も見る人がいないテレビの大きな画面には、弥栄の家が映っていた。弥栄は帽子を深く被り、正面のベンチに腰掛けた。昼過ぎのぬるいワイドショーは、かなりの時間を弥栄のニュースに費やしているらしい。何枚ものフリップが、アナウンサーの手の中にあっただ。あそこに何が書かれているのか、目をこらしても見えない。

先に進んでいた雅美は、弥栄が背後から消えていることに気づき、ぱたぱたと駆け戻ってくる。そして、弥栄の後ろに立った。雅美も、すぐに何のニュースが流れているのか察したらしい。

「あ」と小さく声を上げる。

アナウンサーが「御覧ください」と言うと、殺された三人の顔写真が、名前と年齢つきで画面に映し出された。父の野中嘉之、四十七歳。母の美智子、四十六歳。そして息子の理仁、十七歳。理仁の写真は生徒手帳のものを使っただらしい。四角の枠に収まった写真は、見覚えがあった。

「弥栄くんって、弟さんとよく似てるのね」

「一卵性の双子だから」

慣れ親しんだ回答を、脊髄反射で口に出す。一卵性双生児である理仁と弥栄は、ほとんど同じ顔をしている。家族ですら間違えるくらいだ。少し伸びたこの髪を切れば、弥栄はテレビの中の理仁と、寸分たがわぬ姿になるだろう。

理仁と弥栄の二人は、長い間、髪型を変えることで区別をつけてきた。理仁が短髪で、弥栄が長め。こここのところ中間テストと合唱コンクールが重なって、散髪に行く暇がなかったから、ここにいる弥栄の髪は、今までにないくらい伸びていた。

画面はスタジオに移り、カウンターに座るおじさんとお婆さんと、元ヤンキーという風情の男を映した。

「家には荒らされた形跡があり、現金がなくなっているとのことで、強盗の線での捜査もされているとのことです」

「でもほら、銃殺なんでしょう、みんな額を一発で。強盗が、そんなことします？」

「強盗だとしたら、相当計画的ですね」

勝手なことを、よくぺらぺら話すものだ。弥栄は膝に肘を埋め、頬杖をついた。

「まだ凶器が見つかってないんですよ。犯人が逃げてるとしたら、拳銃を持ち歩いているかも。」

早く見つからないと怖いよね」

別に、お前らが怖がる必要はない。コメンテーターの的外れの言葉にアナウンサーが薄っぺらい相槌を打ち、田宮市一家殺害事件の話は終わった。

弥栄の名前が一度も出て来なかったことに、弥栄は自分で首を傾げる。三つの死体が転がっていて、その家にいるべきもう一人の姿がなければ、その人が犯人だと分かるだろう。なのに、弥

栄の存在を匂わせる発言すらなかった。まだ犯人だと決定したわけではないから、それとも未成年だから、滅多なことは言えないのだろうか。本当は、名前も顔写真も映り込んだ防犯カメラの映像も全部公開されて、国民総動員で搜索されることを期待していたのだけど、そういうわけにもいかないようだ。

「こうやって見ると、テレビって適当ね」

雅美の声に頷いて、弥栄は立ち上がった。背後のテレビは、あのやかましい社長自ら商品を宣伝するテレビショッピングに切り替わっていた。ショッピングセンターで流すべき番組ではないなど、二人はテレビから離れた。

二人は食料品売場に入り、ペットボトル飲料を物色した。大々的に公開されているわけではないが、ネットでは弥栄の顔写真が出回っているし、テレビで流れている死んだ理仁と同じ顔だ。もう少し反応があってもいいのと思うが、実際は、誰も弥栄の顔を見なかった。

ペットボトル二本と小さなクッキーの箱をレジに置き、するすると会計を済ませる。レジのおばさんは、弥栄の顔に目を向けもしない。買ったペットボトルの一方を雅美に渡し、弥栄は溜息を吐いた。

「逃げるには、好都合じゃない」

雅美は笑った。

二人は結局、新幹線には乗らなかった。四時過ぎにララを出ると、駅舎の前に警察官が数名立っていたのだ。紺色の制服は、梅雨の空には少し暑苦しく見える。彼らが弥栄を探しているとは限らないが、すれ違ったら気づかれるかもしれない。捕まったら拳銃も取られ、ロシアンルーレットができなくなる。だから弥栄は、駅に近づく気にならなかった。雅美にそう言うと、なるほどと言って踵を返す。警察に捕まりたくないのは、記憶のない雅美も同じようだった。

弥栄と雅美は、駅に背を向けて歩きはじめた。雅美の引きずるスーツケースが、馬鹿みたいに広い歩道に、がらがらと音を立てた。

駅から伸びる大通りは、新田宮駅につながっている。東京から伸びる私鉄の、終点の駅だ。新田宮駅とJRの大田宮駅は連絡しておらず、市街を三十分以上歩かないと辿りつけない。バスもあるが、次のバスは二十五分後だった。

十分も歩くと、新田宮駅前に横たわるアーケードにたどり着く。ララの誕生によって客が奪われ、息をしているのか不安になるほど、寂れたアーケードだ。平日の夕方まだ明るい時間、放課後の中高生の甲高い声と、行き場のない老人の静かな足音を、雅美のスーツケースの車輪の音が裂いていく。

自転車に乗った高校生とすれ違い、弥栄は、無意識に帽子に手を伸ばした。弥栄が通う学校からは遠く離れているけれど、知り合いが絶対にいないとは言い切れない。見覚えのある制服は見当たらないけれど、顔の皮膚がひりひりして、弥栄は思わず頬に手をあてた。

日が陰り、歩く二人の肩に、冷たい湿気がのしかかる。アーケードの半透明の屋根の下には、梅雨の空気が充満していた。

「何だか、疲れた」

雅美が呟いたその意見には、弥栄も賛成だった。辺りを見回して、誰もいない「ふれあいひろば」に、アーケードの案内板を見つける。どうやら最近作ったばかりのようで、錆びて薄汚れたシャッター街にきらきらと光るアルミ板の地図が不釣り合いだった。その中に、ひときわ大きな敷地を持った店舗を見つけた。そこに彫り込まれていたのは、運良くホテルの名前だった。場所もそう遠くない。踵を返してそこに向かうと、濃い色の木の外壁が、ぱっくりと口を開けているのを見つけた。地元商店街が起死回生を図って作ったのか、妙にリゾート風のホテルだ。入り口を飾る南国の植物は、薄汚れたシャッターの群れの中でひどく浮いていた。

入り口の両脇に据えられた椰子の木がどうしてか狒犬に見えて、弥栄は目を擦る。雅美はスーツケースを引っ張って、木の皮が敷き詰められたような花壇の前に立った。そこには、赤い花をつけたサルビアが並んでいた。

「今の子って、サルビアの蜜飲む？」

雅美はきゅっと振り返り、首を傾げた。急に何をと、弥栄は首を搔く。サルビアの蜜なら小学校低学年の頃によく口にしていたが、そんな話が、今、何か関係があるのだろうか。

「あんだ、金あるの？」

自称誰かを殺して逃げている記憶喪失の人間が、こんなホテルにするすると入れるほど、金

を持っているようには思えない。雅美は手を口にあてて、にやりと笑って頷いた。そして言葉で答えないままホテルに入り、チェックインを済ませた。

「いくらくらい持ってるの」

広くて綺麗過ぎる部屋に一步入り、弥栄は、中断されてしまった質問を続ける。雅美は、部屋に備え付けのティーパックを一つ一つ見ながら答えた。

「とりあえず、財布に十万入ってる」

雅美はハーブティのパックを取ると、ポットにバーコーナーの水道から水を入れ、給湯スイッチを入れる。あっという間に湧いたお湯をカップに注ぎ、中に入れたティーパックを上下させ、二つ並んだカップの片方を弥栄に差し出した。

「クレジットカードも三枚あって、限度額は七十万と五十万。さっきの店で、全部使えた」

それを確かめるために、あんなに派手な買い物をしていたのか。ふうんと、弥栄はハーブティを一口飲む。歯磨き粉に、雑草を混ぜたような味だ。むっと顔をしかめるが、雅美は何でもないように、カップを口に運んでいる。

「じゃあ、余裕なんだ」

弥栄は吹いて冷ましたお茶を一気に飲んで、ベッドに寝転がった。喉の奥に、草の匂いが絡まっていた。殺人犯と、誰かを殺したはずの記憶喪失の人間の逃亡劇にしては、ひどく優雅で緩慢だ。逃げるという言葉の意味を、忘れてしまいそうになる。

「思い出した？」

ぽつりと、弥栄の口から言葉が溢れる。

「記憶、戻った？」

広いテレビ台の前に備え付けられた椅子に腰掛けて、雅美は首を横に振った。まだ、何一つ思い出していないらしい。だけど、その割に雅美は落ち着いている。まるで、何年も前から田宮市に住んでいる人間のようだ。大田宮駅と新田宮駅が繋がっていないことも、大田宮駅を背にして歩き続ければ新田宮駅に着くことも、弥栄は一言も説明していない。記憶喪失になっても、自転車の乗り方のような身体に刻まれた記憶は消えないと聞いたことがある。長いこと田宮市に住んでいれば、大田宮と新田宮の違いは、肉体に刻み込まれてしまうのかもしれない。そんなものが刻み込まれたところで、いいことなんて何一つなさそうだけど。

「免許に住所書いてあるでしょ？それ見て、家に帰れば」

「嫌よ、そんなの」

「何で」

「私は、誰かを殺してここまで来たの。それは絶対。家なんかに戻ったら、みすみす捕まりにくいようなものじゃない」

それはそうだけど、弥栄は伸びをする。自分が何なのか分からないまま犯した罪から逃げ続けることに、違和感を持たないのだろうか。少しだけ考えて、どうでもいいかと、目を瞑る。雅美が何を考えているのかなんて、初めて顔を合わせた時から分からない。

「拳銃、何に使うつもり？」

特に興味もないけれど、目を瞑ったまま弥栄は言う。雅美はええとと呟いて、考えるように口

に手をあてた。

「無差別大量殺人」

えっと声を上げ、思わず弥栄は起き上がる。目が合うと、雅美は肩をすくめて続けた。

「それは冗談だけど、何か、派手なことをやりたいな」

「どんな」

雅美は肩をすくめたまま、首を傾げてにっこりと笑った。

「世界を、変えるような」

ぴしりと、部屋の隅で木が割れるような音がする。何のことはない、ただのラップ音だ。だけど、タイミングは測ったようにばっちりだった。漫画だったら、棘々の効果線が弥栄の周りに走っただろう。反応できず、ただ口をぱくりと開いた弥栄に、雅美は優しく笑いかける。

「お腹空いたね、下のレストランに、ご飯食べに行こう」

返事をする隙も与えず雅美は立ち上がり、さっとドアに向かった。確かに空腹ではあったので、弥栄は、何も言わず雅美に続いた。

弥栄は、目を覚ました。部屋の電気は消えているが、どこかから灯りが入り込んでいるのか、天井がぼんやりと明るい。眠い目を凝らし、風呂場の電気がついていることに気づいた。ドアの隙間から光が漏れて、シャワーの音が聞こえてくる。雅美の姿は、隣のベッドになかった。

弥栄は起き上がり、床のリュックを引き寄せた。ファスナーを開き、拳銃を取り出す。拳銃自体は小さいのに、二リットルのペットボトルを持ち上げたような重量感が、右腕に走った。

弥栄は丁寧に弾倉を外し、弾が一つ、きちんと入っていることを確認する。そして、流れるような動きで弾倉を回し、はめこみながら銃口をこめかみにあてた。鉄の感触が皮膚に伝わるのを感じながら、引き金を引く。

かちりと、金属が鳴る。しんと、部屋が静まり返る。しばらくの沈黙の後、シャワーの音が戻ってくる。弥栄はベッドに倒れた。揺れた髪が、耳をくすぐる。

また、ハズレだ。

ベッドサイドの時計は四時。弥栄は拳銃をリュックにしまい、ベッドから降りた。銃口が触れたこめかみを搔きながら、テレビの電源を入れた。薄暗い中で激しく光った画面に、弥栄は目を細める。じんわりと目が慣れて、ようやく画面が見えてくる。小さな画面に映し出される光景を見て、弥栄は思わず、目を大きく開いた。

そこにあったのは、無残に潰れた大型トラックの姿だった。

首都高速道路で、大規模な交通事故が起こったらしい。どのチャンネルでも、ひしゃげたトラックが映し出されていた。長方形の車体の前半分が、見る影もないほどひしゃげている。道路に転がっている黒い物体は、前を走っていた車だろうか。フロントガラスの破片がきらきらと、飛び散っているのが見えた。

テレビの前で立ち尽くし、弥栄は「負けた」と呟いた。田宮の片隅で野中家の三人が銃殺された事件は、大型トラックに、簡単に吹き飛ばされてしまっていた。

「なに、事故？すごいねえ」

シャワーを済ませ、備え付けのバスローブを着た雅美が背後に立った。弥栄は振り返り、そうと気付かれないように、ゆっくりテレビに目を戻した。バスローブなんて初めて見たが、妙な雰囲気がある。雅美なんかは今更どぎまぎしている自分が恥ずかしくて、弥栄は瞬きもそこそこに、テレビに見入る振りをした。

「ルーレットした？」

「した」

「すごい引き、そんなに当たらないものかな」

雅美は冷蔵庫を開け、缶ビールを取り出した。ベッドに腰掛け、喉を鳴らして飲んでいる。弥栄はテレビに目を向けたまま、着替えをしようとリュックを探った。拳銃をベッドの上に置き、替えの下着を取り出す。すぐにルーレットが当たると思っていたから、着替えは三日分しか持ってきていない。明日もルーレットが外れたら、もう着るものの用意がない。

ふと思い出し、弥栄は口を開く。

「世界って、どうやって変えるの」

こちらを向いた雅美の頬が、ほんのり赤くなっていた。

「たった一人で、一つだけの拳銃で、世界って変えられる？」

少なくとも弥栄は、自分を殺す以外には、何も思いつかない。雅美は答えずビールを煽った。ごくごくごくぐりと一気に飲んで、サイドボードに缶を置く。かぁんと、軽い音が部屋に響いた。

「弥栄くん、ジャスミン革命って知ってる？」

雅美は言葉と同時に、大きく息を吐き出した。弥栄が首を横に振ると、雅美はぼっと立ち上がり、弥栄が座るベッドに飛び乗った。雅美の体重でベッドが軋み、弥栄はぐらりとバランスを崩す。柔らかすぎるベッドは、その上で動くには向かないようだ。

「チュニジアで起きた革命よ、ついこの間じゃない、覚えてないの」

記憶喪失の人間に、そんなことを言われたくない。雅美は、ベッドの上で伸ばした足を揺らしながら続ける。

「革命のきっかけって、何だと思う？」

「テロとか、デモとか？」

「はずれ」

「知らないよ、何？」

本当に知らないし、それ以外に思いつかない。弥栄には、チュニジアがどこにある国なのかも分からない。雅美は弥栄の顔をじっと見つめ、やれやれと言うように首を振った。

「自殺よ」

雅美の口調はあまりに暗く、深刻だった。まるで、自殺した人間の遺書を音読しているようだ。口からビールの匂いがする以外、雅美は立派な大人に見えた。

「失業した青年の焼身自殺。それをきっかけにデモが始まって、革命につながったの」

へえと、弥栄は素直に反応した。どこにあるのかも分からない国の革命のことをちゃんと知っているなんて、これが大人のたしなみだろうか。

「じゃあ、あんた、自殺すんの」

ううんと雅美がうなる。そして、揺れる爪先に目を落とした。

「私の自殺じゃ、何も変わらないでしょ」

ぽつりと言った声あまりに小さくて、弥栄は雅美を見つめた。心臓が、今までと違う音で鳴った。足を捻った時のような、ぐきりという音が胸元で響く。

「チュニジアはね、自殺は宗教的にタブーだし、火葬も駄目なの。だから、焼身自殺のインパクトは、ものすごかったのよ」

どくんどくと、弥栄の耳の奥で鼓動が響いた。

「日本じゃ、誰が死んだって、何も変わらない」

壁に埋め込まれた空調の機械が、ぶうんと震える。雅美の声は、その音にすらかき消されてしまいそうなほど、小さかった。

「そんなこと」

弥栄の言葉は、それ以上続かなかった。

弥栄の世界は、この三日でがらりと変わった。だけど、外の世界は何も変わっていない。高校生

が家族三人を殺したと知られても、朝のニュースは星占いをやるし、連続ドラマは予定通り流れるし、お笑い番組のスケジュールも変わらない。今報道されている交通事故で、どうやら七人も死んだらしいけれど、数日経てば忘れられてしまうのだろう。

喉の奥に乾いた空気が絡まって、弥栄は、声が出せなかった。

「日本じゃ自殺はタブーじゃない。一年で、分かってるだけで三万人死んでるのよ。私、ちょっと前まで東京にいたんだけど、電車なんて毎日止まるからね、人身事故、つまり飛び込み。だけど、誰も心を痛めたりしないよ」

雅美の言葉が、広い部屋にするすると流れる。喉が潤い、言葉が滑らかに溢れていく。口の先だけが動いて、喉の奥や、頭が動いていないような、舌足らずの声だ。酔っ払っているのかもしれない。酔っばらいの戯言として流していいのか、未成年で酒を飲んだことのない弥栄には、分からない。

「あんたは、革命がしたいの？」

ようやく紡いだ言葉に、雅美はゆっくり首を振った。伏せた目が、少し潤んでいるように見えた。

「そういうんじゃないかな。するんじゃないで、きっかけになりたいのかも」

革命のきっかけ。チュニジアの焼身自殺。社会に衝撃を与え、全ての人を駆り立てるような出来事。雅美は指を振り立てて、滔々と語る。

「つまり、日本のタブーを犯すようなことをするべきってことよ」

素晴らしい思いつきを語るように、誰も気づいていない真実を説くように、雅美は声を張った。足を大きく振って、ベッドがぎしぎしと鳴る。弥栄は頬を掻いた。雅美の顔が赤くなるのに比例して、弥栄の頭は冷たくなっていった。

「日本にタブーって、ある？」

弥栄の素直な質問に、雅美は黙った。日本でタブーとされる行動なんて、弥栄には思いつかない。もちろん人殺しはいけないけれど、それで革命になるのなら、日本はきっと、とっくに存在しない。弥栄の世界が壊れたのと同時に、滅亡しているのだろう。

「誰を殺せばいいのかなあ」

雅美はそう言って、ベッドに横たわる。自分がさっきまで使っていたベッドに女が寝転がっているが、弥栄はもう、なんとも思わなかった。雅美という存在に慣れたのだろう。女性とか大人とか、そういうカテゴリーから、雅美が外れたのだ。大人の女が着るバスローブはひどく色っぽくはあるけれど、雅美をそういう目で見ると気にはならない。目の前で服を脱がれても、きっと呆れるだけだろう。

「殺せば世界が変わるような人って、誰かしら」

ああとか、ううとか、意味のない音を発しながら、雅美はベッドの上をごろごろ転がった。どうして誰かを殺すことが前提なのか分からないが、酔っ払いだし、放っておいていいだろう。

弥栄はリュックからシャツを出し、途中になっていた着替えの準備を終えた。バスローブがダンスに入っているようだが、着る気にはならない。弥栄はベッドに背を向けて、風呂場を見る。備え付けのシャンプーだろう、作りもののようなフルーツの匂いが漂っていた。雅美の体からする



のと、同じ匂いだ。

「天皇」

不意に聞こえた予想外の言葉に、弥栄は思わず振り向いて、聞こえた言葉を繰り返す。

「天皇？」

弥栄の頭に、あのひたすらに人のよさそうな白髪のおじいちゃんの姿がよぎった。あの、誰も恨まず誰からも恨まれなさそうな人を、殺すと言うのか。声にならない弥栄の反論に、雅美は大きく頷いた。

「だって、天皇って国民の象徴でしょう？日本の代表でしょう？天皇が襲われたって事件、聞いたことないもんね」

雅美は両手を打ち鳴らし、笑った。弥栄は首をひねる。雅美は本当に楽しそうに笑っていて、酔っていなければ部屋の中を駆けまわりそうな勢いだ。酔ってなければこんなことを言い出さないと、信じたけれど。

天皇のことなんて、弥栄はよく知らない。授業で、天皇は日本の象徴で、国事行為を仕事にしていると習ったが、そのくらいだ。国事行為というのが一体何なのかも、あの優しげなおじいちゃんが、実際にどのくらい偉いのか分からない。確かに天皇の孫が不登校というだけでニュースになるのだから、彼が殺されたりなんてしたら、弥栄の事件やトラックの大事故など、数秒で弾け飛んでしまうだろう。それに、彼が死んだら平成が終わる。最も分かりやすく、世界が変わるのだ。

だけど。

「天皇って、どこにいるの？」

弥栄はおずおずと言う。雅美は笑顔を固定したまま、目を大きく開いた。

「……皇居」

「どこあるの」

「東京」

東京のどこと聞く弥栄に、雅美は答えない。場所はともかくと、弥栄は続ける。

「皇居って、入れる？」

雅美が、ついに黙った。しんとした部屋の中、冷蔵庫のモーターが震えてがくんと止まるまで、二人は何も言わなかった。

先に口を開いたのは、雅美だった。ああと声を上げ、ベッドに倒れこむ。

「駄目ねー、もっとよく考えなくちゃ」

そう言って、雅美は目を瞑った。そうしてすぐに、寝息を立て始める。そこは俺のベッドだけだと、思うことすら馬鹿らしい。弥栄は黙って、風呂場に向かった。

弥栄が風呂から戻ると、雅美は眠り込んでいた。頬を赤く染めて、幸せそうに微笑んでいる。本当にこいつは大人だろうか、弥栄は雅美のバッグを探り、免許証を取り出した。

鹿目雅美、年齢は二十九歳。立派な大人と言っていい年だ。自分が二十九歳になっている姿が想像できないくらいの、年上の人。住所は田宮市内の、弥栄の知らない地名だった。

弥栄は携帯の地図アプリを開き、雅美の住所を検索した。経路検索してみると、真っ先に車での経路が表示される。駅もバス停も、雅美の家の近くには存在していないようだ。

雅美の家は、ここから車で四十五分のところにあるらしい。緑色の広い空間を、太い道路が割って走る地域だ。高等専門学校に面した大きな通りから、ちょっと路地に入った所に、小さな四角がたくさん並んでいる。赤い矢印が示したのは、その中の一つだった。似たような家がたくさん並んだ、住宅街なのだろう。弥栄が住んでいる近くにも、新興住宅地というか、似たような建売の家がたくさん並んでいる一角がある。

ふと、携帯の使用記録で居場所が分かるという、ドラマで得た知識を思い出した。ネットにつなげたりSNSで発信したりすると、位置情報が分かるのかなんとか。どこまでも逃げ切るつもりはないけれど、捕まらないに越したことはない。警察の捜査がどこまで進んでいるのかは、テレビでも新聞でもネットでも分からない。もしかしたら、駅やバスターミナルに備え付けられた防犯カメラの画像を解析して、弥栄が市内にいることを確認しているかもしれないし、今まさにこのホテルの一階で、警察が突入の準備を整えているかもしれない。弥栄は携帯の電源を切り、ベッドに投げた。柔らかい布に包まれ、落下の音はしなかった。

天井に埋め込まれた照明が、部屋を照らしている。月のように、優しい光だ。弥栄は椅子の上で膝を抱え、天井を仰いだ。

世界を変えるという、雅美の言葉を思い出す。中二病とは、このことを言うのだろう。自分が世界に何らかの影響を及ぼせると思っている、青臭い全能感。十七歳の少年である弥栄ならまだしも、二十九歳の大人の女が言っているいい台詞ではない。自分が生きて死んだって、手の届く範囲の人を殺したって、世界は少しも変わらない。それは、他でもない弥栄が証明している。両親と兄弟が死んだ六月十日を境に、変わったのは、弥栄の世界だけだった。

弥栄は立ち上がり、リュックを取って椅子に戻った。拳銃を取り出し、こめかみに押しあて引き金を引く。だけど、何も起こらない。弾倉を回していないから、確率は上がっていたはずなのに。

「一日一回じゃなかったの？」

雅美の声が響く。雅美はいつの間にか目を覚ましていて、ベッドの上でうつ伏せになり頬杖をついていた。

「何となく」

答えながら、弥栄は拳銃をしまう。

「あんたは、世界をどうしたいの」

雅美は起き上がる。だけど、返事はない。弥栄は、ゆっくり言葉を組み立てる。

「世界が、どうなればいいと思ってんの？」

ジャスミン革命のきっかけになったというチュニジアの男は、革命を起こすために死んだのではないだろう。自分の苦しみを人々に知らせるつもりはあったかもしれないけれど、少なくとも、世界を変えようと思って死んだわけではないはずだ。だけど雅美は、世界が変わることを望んでいる。自分が、世界が変わるきっかけになることを望んでいる。それなら、その後の世界のことを考えているはずだ。

弥栄は、雅美の言葉を期待している自分に気づいた。喉が乾き、心臓の音が耳元で聞こえた。だけど雅美は、「どうでもいい」と答えた。

「今と違う世界になれば、なんだって」

雅美に、酔っている様子はなかった。一時間眠っただけだが、酒が抜けたのだろう。弥栄の体温が、すくと下がる。耳が、痛いほど冷たくなった。

「いい方だろうが、悪い方だろうが、変わればいいの」

あれほど寝返りを打っていたのに、バスローブは少しもはだけていない。見慣れないからぎよっとするが、浴衣より機能性がいいのかもしれない。雅美のうねった栗色の髪が、肩でばさりと揺れた。

「いっそ、壊れちゃってもね」

雅美の低めた小さな声は、床下から這い上がってくるような迫力があつた。一時間前に、自分が死んでも何も変わらないと言った声で、雅美は世界の破滅を望む。同じような言葉をどこかで聞いたことがある気がして、弥栄は息を飲んだ。あの時は、世界が終わる話だったけれど。

「変えるより、壊す方が、簡単でいいかもね」

雅美はそう言い、軽く首を傾げて笑った。真夏の暑い日に、クーラーの室外機から溢れる水のように、小さな笑顔だ。まるで、今までの言葉は全て冗談だったとでも言うような。

雅美は肩をすくめ、長い髪を手で束ねて、結うでもなく離した。

「何か、目、覚めちゃったね」

明るい雅美の声を肯定すると、雅美はバスローブをばさりと床に落とした。弥栄は思わず目を見開くが、雅美は下に、タンクトップとショートパンツを履いていた。

おそらく、ここは夢の中。目の前に、今ではもう壊れてしまった、見慣れた風景が広がっていた。

「だから、世界は終わるんだよ。」

懐かしい声が、部屋に響く。とは言え、自分と全く同じ声だ。窓から外を眺めていた、弥栄の声。二分前に今日が終わった空は、星の一つ一つが見える晴天だった。

「な、終わらないだろ、世界」

隣り合う部屋の間の壁を抜いて一つにした部屋には、ベッドが二つ並んでいた。ベッドだけではなく、学習机も本棚も、タンスも二つずつある。高校生になった一卵性双生児の部屋は、判で押したように、同じ物が並んでいた。

ベッドに座って、理仁は漫画雑誌を読んでいた。就寝の準備は全て済み、後は電気を消すだけだ。

「今度こそ、本当だと思ったのに」

弥栄が小さく舌を打つ。二〇一一年十月二十八日。数分前に終わった今日は、マヤ文明に予言された人類滅亡の日だった。

魔術的なまでに発達した古代文明の人々が作り上げた精巧な暦は、この日までしか作られていないらしい。だから、世界が終わる。オカルトマニアの間では、常識と言っているほど有名な話だ。マヤ暦というキーワードで検索すると、恐ろしい数の匿名掲示板のスレッドが引っかかる。その年の三月の震災のこともあってか、日本は、少なくとも弥栄と理仁の周囲は、滅亡の機運に包まれていた。ネットを見ると、まるで二〇一一年十月二十八日に世界が滅亡するのは、夏になると蟬が鳴くことと同じくらい、決まりきったことのように感じられた。

その二〇一一年十月二十八日は、拍子抜けするくらい何事もなく、あっさりと終わりを告げた。

「滅亡だから、月曜の課題やってないのにな」

弥栄は、窓の向こうを覗きこむ。滅亡が歩いては来ないかと、探しているようだ。

「馬鹿」

理仁は漫画雑誌を閉じた。同じ遺伝子を持つ二人でも、中身までは同じではない。理仁はマヤ暦と滅亡をテーマにした映画のCMでマヤ暦を知ったが、弥栄は、二年前から滅亡の日を知っていた。

理仁はベッドに寝転がる。弥栄はカーテンを閉め、壁に寄りかかった。

「まあ、まだ来年があるし」

弥栄はまるで、大会で優勝を逃したスポーツ選手が言う、負け惜しみのように言った。マヤ暦による滅亡の期日は、来年二〇一二年の十二月だ。だけど、暦の読み方によって二〇一一年の十月二十八日、つまり昨日だという解釈もあった。弥栄は、どちらかと言えば、十月二十八日の方を信じていた。その根拠は、今となってはもう分からない。

早く消してよと、理仁が照明を指さすと、弥栄はぱたりとスイッチに歩み寄る。

「だって、こんな世界、終わらないわけじゃないじゃん」

弥栄はそう言って、照明を消した。部屋が闇に落ち、すぐに目が慣れ、部屋の景色がじわりと浮き上がる。弥栄は、まだ壁際に立ったままでいた。

「早く寝ろよ」

しばらくの沈黙の後、隣のベッドに弥栄が寝転がる音が響く。

「滅亡なんて、するわけねえよ。いつまでも馬鹿言ってるなって」

理仁の言葉に、弥栄は返事をしない。しんと、冷たい沈黙が二人を包む。外から、隣の家の犬の鳴き声が聞こえる。最近この辺りに野良猫が増えていて、それに向かって吠えているのだ。

弥栄は、もう寝てしまったのかな。理仁がそう思い始める頃、弥栄は、「うん」と小さく呟いた

。

ホテルをチェックアウトし、雅美と弥栄は、新田宮駅から電車に乗った。平日昼間の四両編成の電車には、一両につき三人も乗っていない。とろとろと走る電車の振動が体に心地よくて、弥栄は何度かあくびをした。

弥栄は携帯にイヤホンをつなげ、テレビを見ていた。昼前のニュースバラエティは、弥栄の事件の特集を組んでいた。

「行方が分からなくなっている野中弥栄さんが、市内の駅で目撃されたとの情報が入っています」

スーツを着込んだアナウンサーの声に、隣に座り、イヤホンを共有している雅美が反応する。

「見つかったんだね」

一番後ろの車両には、弥栄と雅美以外には、誰も乗っていなかった。弥栄は小さく頷いて、携帯の小さな画面を見つめる。

新田宮駅の券売機の端にある、一番高い切符が行く駅は、東京二十三区の隅っこだ。そこに達するまでに、三時間かかるらしい。二人は新しいSuicaを買って、五千円ずつチャージした。一時間に二本しかない電車に乗って、適当な場所で降りて、適当に進んでいくつもりだ。

車窓の景色は、あっという間に変わっていく。新田宮駅の周辺は田宮市内では最も都会で、大きなビルも多い。だけど、次の駅に着く前に、どんどん緑が増えていく。小さな川と桜並木を越えると、背が低い建物ばかりの、住宅街に入り込む。トタンの赤い屋根の端が破れて、ばたばたと風に煽られていた。

「駅で見られたんなら、あんたのこともバレてるかも」

「じゃあ、ホテルも調べられてるね」

そうだねと、弥栄は足を伸ばす。うるさいほどに節電が叫ばれている世の中だけど、電車にはクーラーがかかっている。外は天気がよく、湿気が高いせいもあって蒸し暑い。向こう側の空気が、窓をじわりと温めている。

携帯の小さなテレビの中で、二十分にも渡る弥栄特集のコーナーが終わった。駅で見られたこと以外、大した情報もない。イヤホンを外した雅美が窓の外に目を向けるのを確認して、弥栄は携帯をネットにつなげる。弥栄の事件についてのスレッドは異例の伸びを示しており、中学と小学校の卒業アルバム画像がアップされていた。

「電車降りたら、新しい帽子買おうか」

そう言われて、弥栄は被っていた帽子を取った。オレンジ色の帽子は青い空の太陽を反射して、ひどく眩しい。弥栄は頷き、携帯をポケットに入れた。

「色々、買い物しないとねえ」

雅美はそう言うのと、指を折りながら、靴と服とリュックとと、買い足すものを並べていく。弥栄はその声を聞きもせず、適当に頷きを繰り返した。

三つ目の駅に電車が止まる。数人が降りて、同じだけ乗り込んできたが、弥栄と雅美がいる車両には、誰も入ってこなかった。どの駅も、出口が一番近いのが先頭車両だから、みんなそちら

に乗るのだ。緑色のふさふさとした座席が、虚しく揺れている。

ふと、弥栄は口を開いた。

「世界を変えるのと、壊すのと、終わるってというのは、違うのかな」

正面の窓の風景は、するすると流れていく。駅周辺の住宅街を抜けると、植えたての稲の緑が広がっていた。田んぼか畑の緑の大地の中に、ぼろぼろの木造の家が建っている。家なのか倉庫なのか、よく分からない。その中に突如として、十個程度の墓石が並んだ小さな墓地が現れる。遠くに山が見え、その手前にはひどく背の高い鉄塔が立っている。建設中の高速道路を越えると、新興住宅街が現れる。同じような形の家が、五つくらいずつ、まとまって建っている。あの山を越えても、同じ風景がどこまでも続いているように思えた。

「変えるってというのは、世界が終わらないってこと。壊すってというのは、世界を終わらせるってこと。終わるってというのは、ただ、座して待つってこと」

詩を詠むように語る雅美は、弥栄と同じように正面を見ている。不意に大きな雲が太陽を隠し、辺りが暗くなった。窓ガラスに映り込んだ二人の顔は、何の感情も読み取れない表情をしていた。

「変えるってというのは、世界に期待しているの。いい方だろうが悪い方だろうが、変わるパワーがあるって信じてる。壊すってというのは、そのパワーすらなくそうとする。再起不能なほど滅茶苦茶にしてやるって、世界を憎んでる。終わるってというのは、全部のことを諦めてるの。世界には、もう何の力もないって」

普段から考えていなければ、こんなに流暢には語れないだろう。弥栄は、横に座る雅美の長い睫毛を見つめた。付け睫かマスカラをしているのだろう、黒々と太い。

「世界って、どうやって壊すの」

そうねえと、雅美は自分の頬を撫でる。世界を、滅茶苦茶に壊す。変えられもしない世界を、どうしたら壊せるのだろう。

雅美は、ぼんと両手を打つ。そして、ぱっと、雲が切れたように笑った。

「単純に、すごい事件を起こすとか。安全神話がぶっ壊れるみたいな、自分もいつ殺されるか分からないっていう、混乱の渦？そういうのに、社会を突き落とす、みたいな」

そんな風に言われても、何をすればいいのか分からない。日本全土が去年の三月に、似たような状況に陥ったように思うが、人の力で同じ事をするのは、不可能だろう。田宮市はぎりぎり関東地方に位置するから、地震の直接的な被害を受けた場所は多くなかったけれど、それでも小さな恐慌状態は、身近なところで数えきれないほど起こっていた。物理的に壊れたものはほとんどなかったけれど、人々の心の中にある世界は、ばらばらに壊されていた。正直なところ、あの時自分がどんな気持ちで日々を生きていたのか分からない。一ヶ月くらいは、余震で家が崩れて死ぬ夢を見ていた気がする。

雅美は顎に指をあて、天井を仰いだ。

「地下鉄に毒を撒いたり、水道に毒入れたり、電車を爆破させたり」

ぶつぶつと並べる犯行計画は、どうにも具体性がない。安っぽい刑事ドラマの、スピンオフ映画のようだ。大体、田宮市に地下鉄はない。水道に毒なら、一ヶ月くらい前に隣の県であったと

いう話を聞いた。

「細菌ばらまくとかもいいよね、どっかの研究所で開発してるヤバイ菌を盗んできて、ビルの屋上から風に乗せて」

どこかの研究所がどこで、ヤバイ菌が何なのか、質問する気にもならない。そんなものが日本に実在するのも、弥栄には分からない。

「何て言うか、いつ殺されるか分からないー、みたいなの。殺さなきゃ殺されるっていう、疑心暗鬼な社会？」

漫画の読みすぎなんじゃないかと、弥栄は目を細めた。雅美の表情は、輝いているようにすら見えた。

「やっぱり無差別殺人かな？ 駅とかで、通勤してきた人を殺しまくるの」

雅美の声は弾んでいたが、大きな声で言うことではない。この車両に人はいないが、隣の車両には、五歳くらいの子供を連れた女が座っている。弥栄は溜息を吐いた。

「田宮で働いてるやつなんか殺しても、大したことなさそうだけど」

雅美は目を丸くして、弥栄を見た。そして、はははと声を上げて笑った。

「確かにそうね。こんなところで事件起こしても、ニュースにすらならなかったりして」

それは言い過ぎだ。弥栄は口を開いたけれど、声を出す前に、はたと口を閉じた。弥栄には昔から、朝食時にテレビのニュースを見る習慣があった。公営放送のニュースは、田宮市内で起きた事件なら、ちょっとした交通事故とか窃盗とかでも丁寧に報道している。だけど、遠く離れた日本の端っこで起こった事件は、殺人などの重大事件しか目にしない。テレビの放送局が違っていると、報道される事件も違うのだ。東京や仙台や大阪などの、大都市で起きた事件ならば違うけれど、関東の片隅の小さな市で起きた事件は、きっと九州では報道されないのだろう。弥栄が起こした事件すら、向こうの人々が知っているかは、疑問だ。

弥栄は窓の外を見て、ああと小さく声を上げる。田舎だ。今朝のニュースで大規模に報道されていた、事故を起こしたあのトラックが、高速道路のガードレールではなく田宮市の用水路に突っ込んだなら、テレビカメラは来なかっただろう。例え、同じように七人が死んでも、きっと。

窓の外で、じわじわと建物が増えていく。そろそろ駅だ。電車が駅に入る直前、大きなショッピングセンターが見えた。弥栄の家族が使っていたような、郊外型の複合商業施設だ。雅美が降りようと言い、弥栄は頷いた。

「あそこで買い物しようよ、そろそろ、お腹も空いたしね」

電車を降りると、湿った温い風が頬を撫でた。濡れた土の匂いがする。改札の駅員に切符を渡し、体育倉庫程度の大きさの駅舎を出た。曇り始めていたが、空は白く明るかった。馬鹿みたいに広い道路には車も人も通らず、遠くに、目的のショッピングセンターの頭が見えた。

「東京行こうか」

先に立って歩いていた雅美が、くるりと振り向いて言う。

「東京はね、人が本当にすごいんだよ。ディズニーランドの行列で道路が埋まってるっていうか、もっとかな、それが、勝手にばらばら歩いてくから」

雅美は以前、東京にいたことがあると言っていた。記憶喪失なのに過去を覚えているのは不思議だが、そういうものなのだろうか。雅美の頭に広がっている東京の風景が、うまく想像でき



ない。ディズニーランドにだって、数えられるほどしか行ったことがない。実感も持てないまま、弥栄は軽く相槌を打つ。

「オフィス街がいいのかな、新宿とか、丸の内？そういう所なら、偉い人もいっぱいいるよね」  
雅美は、ヒールを鳴らして立ち止まる。そしてぐるんと振り返った。出会った時と同じ動作だ。頭を中心に、髪が大きく円を描く。弥栄は、新宿も丸の内も知らない。イメージだって、ちらりとも浮かばない。

「東京行って、みんな殺そう」

雅美は、後ろで手を組んだ。弥栄が頷くと、雅美は満足そうに笑い、歩き始めた。かつんかつんと、靴のヒールが音を立てる。弥栄は少し立ち止まり、その背中を見ていた。あんなに細い棒に体重を乗せて、よく歩けるものだ。

乱射できるほどの銃弾をどうやって手に入れるのかとか、借りた車の中で俺のロシアンルーレットが当たったらどうするんだとか、色々なことを思ったけれど、弥栄は黙って、雅美についていった。

ショッピングセンターで雅美が買った、弥栄の新しい帽子は、つばの大きな、黒いニットキャップだった。分厚いつばを前に引き降ろせば、自然に顔を隠すことができる優れたものだ。弥栄が選んだわけではなく、気がついた時には、雅美に被せられていた。

弥栄のリュックも服も靴も、雅美のカードで購入した。雅美は東京へのロングドライブに備え、飲み物や菓子や眠気覚ましや酔い止め薬など、色々なものを買い込んだ。

「隣の駅前に、レンタカーあるんだって。今日はこの辺に泊まって、明日、借りに行こう」

ショッピングセンターから歩いて行ける宿泊施設は、ラブホテルしかなかった。雅美はためらう様子もなく、のれんのような入り口をくぐって中に入った。弥栄は少し迷ったけれど、雅美に名前を呼ばれる前に、慌てて後を追った。そういう経験のない弥栄は、ラブホテルにだって、無論入ったことがない。

受付の顔が見えないカウンターで鍵を貰い、部屋に入る。ラブホテルと言ってもけばけばしいわけではなく、フロントから部屋の前の廊下までは、雅美に会った日に泊まったビジネスホテルによく似ていた。部屋の壁も、ただの白だ。だけどその真ん中に、丸くて大きなベッドが置いてある。シーツはひたすらにピンク色。風呂場はガラス張りだった。

弥栄は思わず、ドアの前で足を止めた。一つの目的に特化された部屋に、泊まるためだけに入室するのは、恐ろしいほど気が引ける。雅美はお構いなしに足を進め、テレビのリモコンを握って、丸いベッドに座った。今まで泊まってきた二つのホテルよりもテレビが大きいのは、どうしてなのだろう。

「弥栄くんのニュース、ないね」

雅美が言い、ベッドにごろりと転がる。弥栄が捕まらない限り、これ以上の報道がされることはないのだろう。どの番組でも朝に起きた交通事故の検証に長い時間が割かれていて、二日前にしきりに報道されていた芸能人の離婚がこじれて裁判がどうのというニュースは、完全に鳴りを潜めていた。

ショッキングな事故の映像から画面がスタジオに戻り、バックの音楽が、どこかで聞いたアクション映画のBGMに変わる。そして、半笑いのアナウンサーが口を開いた。

「二〇一二年で終了しているとされていたマヤ暦の、続きが見つかったと発表されました」

耳に熱湯が流し込まれたように、どくりと心臓が鳴る。弥栄は、思わずテレビに駆け寄った。

「研究チームは、二〇一二年十二月で終わっているとされていたマヤ暦の、続きが発見されたと発表しました。発見された暦は、あと六千年分あるとのことですよ」

その声に乗って、海外のジャングルで発掘作業をしている人達の映像が映し出される。五人の黒人と一人の白人が、石の板を覗き込んでいた。

「マヤ暦って、世界が滅亡するやつ？」

そんな映画あったねと雅美は立ち上がり、風呂場に向かった。興味がなさそうだ。弥栄は入れ替わりにベッドに腰掛け、テレビの音量を上げる。マヤ暦の話はすぐ終わり、スポーツニュースが始まった。読み方の分からない相撲の番付表が、ずらりと映し出される。弥栄はチャンネルを変えたが、他にマヤ暦の話をしている番組は見つからなかった。

世界が、滅びない。

ガラス張りの風呂場から、シャワーの音が響いた。カーテンがきっちり閉まっているので、雅美の姿は見えないし、見る気もない。弥栄はただ、明日の天気予報を流し始めたテレビ画面を、じっと見つめていた。

自分は、今、ショックを受けている。冷静になろうと、今の自分の状態を頭の中で記述してみるけれど、効果はなかった。目玉が心臓になってしまったように、どくどくと痛い。

マヤ暦の存在を知ったのは、ハリウッド映画のCMだ。だけど映画は見していない。古代文明にも人類滅亡のオカルトにも、弥栄は興味がなかった。そのはずなのに、この反応は何だ。耳元で、血管が張り裂けそうに、がらがんと音を立てている。

弥栄は、黒いリュックを引き寄せた。拳銃がベッドの足にぶつかって、固い音を立てた。弥栄は安全装置を外し、弾倉を回して銃口をこめかみにあて、引き金を引いた。かちと、金属が外れる音が響く。そして、それだけだ。銀の弾丸は、的外れの場所に収まっていた。

弥栄はベッドに拳銃を放り投げ、仰向けに倒れた。天井には、小さな電球がいくつもはめ込まれていた。本来この部屋は、暗くして使うものなのだろう。べたりとついた蛍光灯に照らされた、穴だらけの天井は間抜けでしかない。それがじわじわと迫ってくるように見えて、弥栄は瞼に手を置いた。

掌の暗闇の下で、弥栄はゆっくり息を吐く。瞼に触れた手が濡れて、開いた目の端から水がベッドに流れて、初めて自分が泣いていることに気づいた。

「弥栄くん、どうしたの？」

雅美が部屋に戻ると、ふわりと石鹸の匂いが漂った。弥栄は目を擦り、手をぱたりとベッドに落とした。胃が悲鳴を上げ、空気の塊が詰まったように、喉が痛んだ。

「世界が、終わらないんだ」

掠れた声で手が震え、指に冷たいシーツが触れた。声と一緒に体に詰まった空気も抜けていき、今度は逆に、自分の中が空っぽになったような感覚に襲われる。左手から数センチのところ

、ベッドが沈んでいるのが分かる。拳銃だ。何も撃ち抜こうとしない、臆病な拳銃。

「今年で終わるはずだったんだ、世界は、滅亡するはずだった」

自分と同じ声が、頭の中で響く。二〇一二年が終わる頃に、世界も終わる。だから、今、どんなに辛いことがあっても大丈夫。

いつかどこかで聞いた言葉は、生まれた時から聞いていた声で発せられたせいで、いつのことだか思い出せない。

滅亡なんて、信じていなかった。そのはずなのに、いつの間にか心に刷り込まれていた。滅亡を信じてこの数日を生きていたから、弥栄はもう、どうしたらいいのか分からない。

弥栄は天井を見つめた。眼球全体に涙が広がり、視界が均等に歪んでいる。このニュースがもっと早く放送されていたら、どうなっていただろう。予言を疑って引き金を引く前に、滅亡自体があり得ないことだと、証明されていたら。

「終わらないよ」

雅美の声が、白い部屋に響いた。弥栄の額に、熱い手が触れる。子供の熱を額で測る母親のように、死んだ人間の目を閉じる医者のように、雅美はただ手を置いた。シャワーを浴びたからか、雅美の手は湿っていた。額に触れた指の腹の血管が、ぴくりぴくりと動いている。

「誰かが殺さないと、誰も死なないの」

何と答えていいか分からず、弥栄は、吸い込んだ息をそのまま吐いた。涙の理由が言葉にならない。自分でだって、どうして泣いているのか分からない。雅美の冷たい声が針になって、弥栄の目玉を刺し貫く。ずきりと、眉間が痛んだ。

「だから、世界を壊すの」

涙が頬を流れ、耳に触れた。弥栄の背中がぞくりと粟立った。

雅美の手が視界の端を滑り、弥栄の額から遠ざかる。体を起こすと、雅美は、右手を庇うように抱えていた。

喉の奥に心臓が詰まったように、声が出せない。苦しい沈黙の後、さまよっていた視線がかけ合う。雅美は、右手を隠すように背後に回し、笑った。

「明日、車借りに行こうね」

言葉を忘れてしまったように、弥栄は雅美を見つめる。化粧を落とした雅美の目は、薄い膜が張られているように霞んで見えた。

雅美はふうと息を吐いて、タオルで髪を拭いた。一方的にコミュニケーションの終了を告げられ、弥栄の喉で空気がもつれる。だけど、これ以上彼女と何を話したらいいのか、分からなかった。

。

濡れた頬が気持ち悪くて、弥栄はTシャツの裾を引き、顔を拭いた。シャワー浴びればと、雅美が呟く。弥栄はそれに返事をせず、立ち上がって風呂場に向かった。

殺人犯と記憶喪失の逃亡犯という、信頼性の欠片もない二人連れだが、車は簡単に借りられた。雅美の免許証はちゃんと有効で、現金の手持ちもあったから、手続きはスムーズに済んだ。

雅美がお金を払っている間、弥栄は帽子を深く被って、待合室のテーブルで新聞を開いた。大田宮駅で弥栄が目撃されたという記事を隅に見つけたが、雅美のことは書いていない。バレてないのか敢えて伏せているのかは分からないが、とりあえず、こそこそする必要はないのだろう。

「弥栄くん、お待たせ」

よく平気で名前を呼ぶなど、弥栄は顔を上げる。弥栄という名前は男子としては珍しいはずで、新聞やニュースをチェックして正確に記憶している人なら、すぐにあの野中弥栄だと分かるだろう。そんな人間が存在しているとは、とても思えないけれど。

雅美は、レンタカーのキーを指でぐるりと回した。

「あんたのことは、バレてないんだね」

「そうみたい、レンタカーなんて使うの初めて。ちょっと緊張した」

小首を傾げて笑う雅美は、弥栄と同じくらいの少女に見えた。今日はひどく化粧が薄く、眉毛くらいしか書いていないから、そう見えるのかもしれない。

「じゃあ、早速行こう」

雅美が借りた車は、カーナビのついた青銀色の軽だった。最初の目的地は、ファミレスだ。ラブホテルに朝食のサービスなどなく、近くに手頃な飲食店もなかった。だから先に車を借りて、その後に腹ごしらえをしようということになったのだ。

雅美はカーナビを起動し、周辺情報を検索する。レンタカーの車内には、消毒液とゴムを混ぜたような匂いが充満していた。弥栄は窓を少し開けて、隙間から風を入れた。車が発進すると、冷たい風が音を立てる。

弥栄は、ぼんやりと声を風に乗せた。

「俺にも、あとで運転させて」

「免許あるの？」

「原付なら」

「いいけど、何で？」

「ずっと運転してたら疲れるじゃん。交代できるように、練習」

「ま、気がきくのね」

雅美は上機嫌で、鼻歌を歌いながらハンドルを握っている。弥栄は、数日前の家を出た日のことが、思い出せなくなっていることに気づいた。自分がどうしてここにいるのかもあやふやだ。どうして自分はまだ生きていて、雅美と東京に向かっているのだろう。

弥栄は窓枠に頬杖をついて、流れる景色を眺めていた。腰の曲がったおばあちゃんが、弥栄が這うよりも遅いスピードで歩いているのが見えた。

弥栄がここにいるのは、雅美の意志だ。雅美は、世界を壊す武器を欲しがっている。それは、弥栄の拳銃だ。こめかみを撃ちぬいた弥栄の傍らに転がっている拳銃を拾い上げるため、彼女は弥栄と一緒にいるのだ。こんなに長く生きるとは思っていなかったから、簡単に了承してしまった

けれど、このまま当たりが出なかったらどうなるのか、想像するだけでうんざりする。

弥栄は、新しいリュックから拳銃を取り出した。雅美に昨日買ってもらったリュックはカーキ色で、いくつもポケットがついていたけど、そこに入れるべきものもなかった。弥栄の荷物は、ホテルのコインランドリーで洗った着替えと、財布と拳銃だけだ。

弥栄は弾の存在を確認して、弾倉を回す。金属が擦れる音は、エンジン音と雅美の鼻歌に紛れて聞こえなかった。弥栄は濃い灰色の天井を仰ぎ、回転する弾倉を戻す。セットする瞬間を見ないのは、弾がどこに入ったのか分からないようにするためだ。湿った金属が、ひたりとこめかみに貼り付く。鉄の匂いが、弥栄を包んだ。

雅美は車の運転が出来るのが楽しくてしかたがないとでも言うように、ぐっとハンドルを切った。重力が肩にかかり、弥栄の体が右に傾く。ぐらりと揺れた体を引き戻し、弥栄は、拳銃をリュックに戻した。

「今日は一日、運転の練習してみようか。この辺なら、あまり車も来ないしね」

雅美の弾んだ声に、弥栄は喉の奥でうんと答える。頭が、凍りついてしまったように冷たい。弥栄は窓ガラスを撫でた。手だけが熱く、ガラスの冷たさが気持ちよかった。

窓の向こうを流れていく景色を、弥栄はぼんやりと眺める。大きな道沿いに、ホームセンターや大手の塾や色々な建物が並んでいて、その奥は住宅街だ。大田宮駅の周りを除けば、都会な方だろう。けどその背後には、頭に雲を被った山並みが見える。弥栄が住んでいた辺りとは逆方向だが、雰囲気はそっくりだ。

弥栄は窓を閉めた。きゅっという音と同時に、車内の空気が丸みを帯びる。空調から、しつこく消毒の匂いが噴き出してきている。

ファミレスでの遅い朝食の後、弥栄は雅美に車の運転を習った。さすがに原付とは仕組みが違うが、似ているところもたくさんあった。休憩を挟んで三時間も練習すれば、通り一遍の運転はできるようになった。すごいじゃないと雅美は笑い、助手席から後部座席に移った。

「じゃあ今日はどこかに泊まって、明日、東京に行きましょう。この分なら、高速道路でも交代できそう」

雅美は伸びをし、あくびをした。寝ててもいいよと言うと、雅美はからかうように、「大丈夫？」と言う。

「じゃあ、カーナビで近くのホテル探してね。お言葉に甘えて、私はお昼寝させてもらう」

返事をして、弥栄はカーナビの電源を入れる。ホテルを検索していると、後部座席で雅美が寝息を立て始めた。雅美は、びっくりするくらい寝付きがいい。寝ようと決めた瞬間に、まるで電源を切るように、眠りに落ちている。

検索範囲をどんどん広げて、やっと見つけたビジネスホテルは、ここからかなり遠かった。弥栄は地図の拡大と縮小を繰り返し、周辺の様子を眺める。ホテルは、今いる太い道から細い道に入り、地図上に何も表示されない広い空間を通り抜けた後、更に太い道に出た、その先にあった

。

弥栄は、ふと、カーナビに表示されている地図が、雅美の住所を検索していた時に携帯で見た地図とよく似ていることに気づいた。緑色の広い空間と、同じくらいの四角形の集合。携帯の地図

アプリを開くと、前に検索した地図が表示される。そこに表示された道々は、やっぱり同じ形をしていた。

弥栄は頬を掻いて、車のキーを回す。エンジンが始動し、車全体が柔らかく揺れた。

そこは、住宅街の真ん中だった。高専沿いの大きな道を左折して、区画整理された細い道を進んでいくと、同じ形をした家々が並ぶエリアに辿りつく。昨日、車窓から飽きるほど眺めた新興住宅地が、色も形もそのままに、どこにでも点在している。弥栄は地図を見ながら、細い道を慎重に進んでいった。

きっちり整列したクリーム色の壁の建物は細長い二階建てで、部屋数はそれほど多くなさそうだ。核家族のための家だろう。大きな窓にかけられたカーテンの色でしか、家々を区別できない。薄赤い夕暮れの中、黄緑色のランドセルの女の子が、石を蹴りながら歩いている。

クリーム色の角を曲がると、一回り大きな家の群れに突き当たる。少し大きな家が、同じ姿で四件並んでいた。二台分の駐車場があり、二階には広いベランダもある。こちらは、何人くらいの家族を想定しているのだろうか。薄いピンク色の壁は、こぼれ落ちた脳にも似ていた。門は鈍い銅色だが、ひどく軽そうだ。主成分は、プラスチックか何かなのだろう。

KANAMEと書かれた表札の家の前で、弥栄はブレーキを踏む。その家の駐車場には、青い車が停められていた。ベランダの洗濯物が風にはためいて、一階の窓にはよしずがかかっている。窓の下には植木鉢が並び、幾つかは、大きなつぼみをつけていた。

ここまで一緒に進んできたカーナビが、道案内を終了しますと言って黙り込む。弥栄はエンジンをかけたまま、サイドブレーキを下ろした。

「どうして」

ぽとりと落ちるような声が、狭い車に響いた。後部座席を振り向くと、眠っていたはずの雅美が、いつの間にか体を起こしていた。弥栄は、用意していた答えを口にした。

「変なことする前に、考えなおした方がいいと思って」

雅美は正座のまま、氷漬けになったように外を見つめていた。ほどけてもつれた髪が空調に煽られ、ぱさぱさと舞っている。異様な緊張にあてられ、弥栄は空気の塊を飲み込む。そして、当然のここのように、軽く言った。

「家に戻ったら、何か思い出すかもしれない。家族が心配してるだろうし、記憶喪失の変なテンションで、人を殺すことないよ」

雅美は、家を覚えているようだ。弥栄は、柔らかい運転席に背中を埋めた。メッシュのような肌触りが、シャツの向こうで擦れる。

「家があるなら、帰った方がいい」

弥栄は車のドアを開け、外に出た。梅雨の明けかけの晴天が眩しく、弥栄は顔の前に手をかざし、目を細める。光を見つめると、鼻の奥がむずりとした。半袖でもよさそうな気候に、弥栄は腕まくりをした。

弥栄は後部座席のドアを開け、雅美に手を伸ばした。灰色の座席に座り込んだ雅美は、ひどく小さく見えた。

「大丈夫。世界はちゃんと、俺が壊すから」

雅美の薄く開いた唇は何も言わず、頬が小刻みに震えていた。大きく開いた目の中で、瞳が針

の先ように細くなる。

弥栄が冷たい手を引くと、表情とは裏腹に、雅美はするりと外に出た。白い爪先が剥げ、黒い土台が覗いた靴が、コンクリートに当たって音をたてる。

「いや」

青くなった唇から漏れた、雅美の一言が聞こえなかった。えっと聞き返した弥栄の声は、背後から投げつけられた言葉にかき消された。

「雅美！」

玄関が大きく開き、男が一人現れた。彼は足元を見ずにサンダルを引っ掛けて、あっという間に道路に駆け出る。弥栄がその顔を見る前に、男は雅美の腕を掴んだ。男の背後で、勢い良く押し開けられた門が反動で閉まり、がんと大きな音を立てる。

「どこに行ってた！」

上ずった男の声が、頭の中できんと鳴る。日に焼けた顎にぽつぽつと生えた髭が、西に傾きかけた太陽の光を反射していた。目の前で、汗と煙草の匂いが弾ける。

すぐに玄関が開き、どうしたと、男がもう一人現れた。雅美の腕を掴む男によく似た、弥栄の父親よりもずっと年上の男だ。彼も、こちらを見るとすぐに目を大きく開いて、靴を履くのもそこに、道路に出てきた。学校のロッカーの隅に置き去りにした使えばなしの体操着と、煙草と中年男を絶妙のバランスで配合した空気が、弥栄の目の前で絡む。

「あんた、自分が何をしたか分かってるのか」

耳を突く大声に、弥栄はびくりと身体を引いた。手に持ったリュックが車のドアにぶつかって、固い音を立てる。雅美は瞬きもできず、目をかっと開いたまま、二人の男の間で目を泳がせていた。真っ白な頬が震え、目の縁が赤くなっている。

二人の男は、弥栄をちらりとも見ない。自分が車の一部になってしまったように感じ、弥栄は唾を飲み込んだ。喉が、えぐれるように痛かった。

「来い」

空気を引きちぎるような声で叫ぶと、二人の男は雅美の腕を掴んだまま、ぐるりと家に向き直った。雅美の両腕に、男の太い指が食い込んだ。雅美は地面で踏ん張ったが、男二人を相手に、そんな抵抗は意味がない。雅美の白いふくらはぎが、ぶるぶると震えているのが分かった。

不意に、ゆっくりと玄関が開く。顔を出したのは、雅美とは似ても似つかない女だ。ぐねぐねとうねった髪を束ねた、おばさんと婆さんの中間の女。短い前髪の奥に、大きな絆創膏を貼っていた。ぼうぼうの眉を震わせて、彼女は、男二人に引きずられる雅美を見る。二人の目が合った。弥栄がそう思った瞬間、コンクリートを削っていた雅美の靴のヒールが、ごきりと音を立てて折れた。

「どうして」

地面を這いずる風のような声で、雅美が言った。

騒がしい声が聞こえたのか、隣の家、二階の窓が開く。角を曲がろうとしていた小学生が立ち止まり、泣き出しそうな顔でこちらを見ている。

女は玄関を大きく開き、逃げるように姿を隠した。



「嫌！」

雅美は、目が覚めたように大声を出した。耳元で何かが破裂したように、きんと痛む。雅美は男の手を振りほどこうと、ぐいと身体を捻った。長い髪が振り乱され、顔に絡まる。その向こうに覗く雅美の頬は、ペンキで塗りたくったように白い。

弥栄が想像していた家族の再会とは、全く違う風景が目の前にあった。鹿目という表札が掲げられた家から出てきたのは、雅美とは、どこも似ていない三人だけだ。ここは、本当に雅美の家だろうか。口のすぐ手前まで上ってきた心臓が、ぼくぼくとひどい音を立てている。それに邪魔され、空気が体に入らない。頭がぼおっと熱くなり、視界が白く霞んだ。

弥栄はリュックから、冷たい金属を引き出した。手の甲を、リュックのファスナーがざらりと擦った。弥栄は、雅美のいる方に銃口を向けた。

自分以外のものに銃口を向けたのは、これが二回目だ。

ためらいもせず、引き金を引く。

何より先に、ぱあんと、軽い爆発音が響いた。飛び出した弾は誰にも当たらず、銅色の門柱に喰いこんだ。かあんと、鉄棒を叩くような音が響いた。

切り裂かれた空気が音を失い、痛いほどの沈黙が降りかかる。二人の男は音に固まり、弥栄を見てばかりと口を開けた。衝撃を受けた掌が痺れる。弾き出された葉莖が、ぱたりと地面に落ちた。

びくんと、雅美の背中が揺れる。ああとか、きやあとか、うわあとか、言葉にならない声を上げて、雅美は男の手を振り払った。片方だけ折れたヒールにバランスを崩すが、雅美は、転がるようにこちらに駆けてくる。

「弥栄くん！」

弥栄は、雅美に手を伸ばした。雅美の手は、全身の血がこぼれ落ちてしまったのではないかと思うほど冷たかった。

弥栄は雅美の手を掴んで、後部座席に放り込むように、腕を思い切り振った。ぶんと、風が走る。雅美は倒れるように車に乗り、その勢いのままドアを閉めた。車のドアを閉める音が、銃声より大きく夕暮れの住宅街に響く。

弥栄が運転席に乗り込みアクセルを踏むと、轟音を立ててエンジンが吹き上がる。雅美に教わった発進時の注意が、ちらと頭をかすめたが、弥栄は思い切りアクセルを踏み、勢い良くハンドルを切った。幸運なことに何にもぶつかることなく、車は風のように駆け出した。

弥栄は、ただ、がむしゃらに走った。大きな通りに出て、細い道を抜け、田んぼのあぜ道を走った。別の太い道に出て、ここはどこだと思う頃には、日が沈み、夜になっていた。カーナビによるとここは国道らしいのに、車はほとんど走っていない。両側を田んぼに挟まれた道には、街灯以外に灯りはない。

「記憶喪失、嘘じゃないよ」

後部座席の雅美が、ぼつりと言う。

「本当に、何も覚えてなかった」

弥栄は返事をしない。雅美も、求めているないだろう。

「殺したと、思ってたんだけどなあ」

きっと、あの女のことだ。玄関から顔を出した初老の女は背が低く、雅美が右手で固い物を持って正面から殴りかかる姿が、容易に想像できた。額に貼られた大きな絆創膏が、うっすらと赤く染まっていたように思う。

「あんたの壊したい世界は」

赤い信号が、弥栄が停まる直前で青に変わる。弥栄はぐっとアクセルを踏み込んで、口を開いた。

「あいつらなんだね」

雅美は答えず、助手席の背後に頭を押し付けた。バックミラーから雅美の姿が消え、弥栄は思わず目を細める。雅美が消えてしまっても、今なら少しも驚かない気がした。

「旦那と舅と姑よ、同居なの、結婚して三年目」

高校生の弥栄には、全く馴染みのないフレーズだ。相槌も打たず、弥栄は黙って車を動かす。暗闇に落ちた直線道路は、どこまでも続いていくように見えた。それこそ、世界の果てまでも。

「姑を殺そうと思った。舅も、旦那も殺したかった」

重苦しいほどに低い声で、雅美は淡々と続ける。泣いているのかもしれないと思ったが、それを確かめる術はない。

「動機は勝手に想像して、それが、きっと正解だから」

冷たく言い放った雅美の声を最後に、車の中は沈黙に包まれた。エンジンの音だけが、変わらずいつまでも響いていた。

白い建物に挟まれる道の路肩に、弥栄は車を停めた。静まりかえった空間にエンジンがうるさいほどに響いて、弥栄は慌ててキーを回した。車はぶるんと大きく身震いし、冷たい沈黙に横たわった。

道は暗く、ぽつぽつと立つ街灯が、自らの周囲だけを照らし出していた。フロントガラスを通した光で、車内がぼんやりと浮かび上がる。カーナビで調べたビジネスホテルは反対方向で、近くにホテルはないようだった。

後部座席の雅美が、口を開く。

「最後の一発、使っちゃったね」

弥栄は、バックミラーも見ないまま頷く。

「ごめんね」

弥栄は、今度は首を横に振った。伸びた髪が、ぱさぱさと首に触れた。首に毛先を感じることに慣れなくて、弥栄は首を搔いた。

「明日は、東京に行くんでしょ」

弥栄の言葉に、雅美は答えない。構わず、弥栄は口を動かす。

「疲れたから、ここで寝よう。目が覚めた方が運転しようよ」

言いながら、弥栄は助手席に移る。雅美は頷き、後部座席に寝転がった。先ほどの興奮が嘘のように、雅美の呼吸はすぐに落ち着く。寝付きがいいにもほどがあるだろうと、弥栄は座席を少し倒した。

高級住宅街か何かだろう。目の前の背の高い建物は、マンションのようだった。広い自動ドアの向こうに数字のパネルがあり、その横に管理人室らしき窓がある。夜の三時、車も人も、通る気配がない。

エンジンを止めた車の中の空気は、じわじわと濁っていく。梅雨はまだ明けないのか、生乾きの服を着込んでしまったような不快感が、体を包んでいる。

弥栄は、腹の前でリュックを抱えた。たくさんの空のポケットが、腹にごつごつと当たる。弥栄は拳銃を取り出し、ひとまず膝に置いた。六時間前に発砲したとは思えないほど、黒い金属は冷たく沈黙していた。

弥栄は更にリュックを探り、財布を取り出す。雅美に会ってから一度も開いていない財布の小銭入れには、最後の弾丸が入っている。くすんで濁った小銭の中に、清廉な銀色が輝いていた。

弥栄は弾を手にとると、空の弾倉に装填した。冷たい弾丸は、世界が始まる前からそこにいたように、しっくりと馴染んだ。

雅美が背後で、すやすやと寝息を立てている。弥栄は、慣れた手つきでロシアンルーレットの準備をした。弾倉を回すと、しゃりしゃりと、金属が削れる音が響いた。

弥栄は振り返り、体をねじる。後部座席で眠る雅美はこちらに背を向けていて、長い髪が座席に大きく広がっていた。深い茶色の髪は、この暗さだと真っ黒だ。血がぶちまけられても、コーヒーをこぼしたようにしか見えないだろう。

弥栄は右手を大きく伸ばし、雅美の頭に拳銃を突きつける。金属が髪に潜り、こつりと頭に当

たる。だけど雅美の寝息に変化はなく、何かに気づいた様子もない。朝になれば必ず目が覚めると、信じている呼吸だ。

眠る兄弟の額に銃口を突きつけた彼も、こんな気分だったのだろうか。自分以外の人間の命を、勝手に賭けのテーブルに乗せる緊張、高揚、微かな罪悪感。

鼻の奥に、不意に記憶が蘇る。弾き出される血の匂いが、目の前に漂った。人の命が弾け飛び、溢れ出し、蒸発する匂い。理科の実験で化学物質を合成して創り出した有毒な気体を、うっかり吸い込んでしまった時のように、喉がひりひりと痛む。

弥栄は、引き金を引いた。撃鉄が落ちる、何度も耳元で聞いた音が、雅美の後頭部で響いた。そして、何も起こらない。狭い車には、寝息と心臓の音だけが残っていた。後部座席に転がっているのは、安らかな寝顔だけだ。

ふふふと、口から笑いが漏れる。ここまで続くと、笑うしかない。鹿目家の門柱には間違いなく当たったのに、どうしてここで、弾が出ないのだろうか。

弥栄は笑いながら、座席に体を埋めた。試験やら何やらで忙しかったから、髪の毛は数ヶ月伸ばしっぱなしだ。ここまで伸びたのは初めてで、弥栄は瞼にかかった前髪を掻き上げた。頭を動かすたびに毛先が目には刺さるので、この数日で視力が落ちた気がする。

弥栄はもう一度、弾倉を回した。こめかみに触れる銃口が、いつもより温かい。さっき雅美の後頭部に触れたからだろう。

このルーレットで最後にしよう。弥栄は拳銃を自分に突きつけたまま、目を開いた。

闇に浮かんだフロントガラスには、自分の顔が映り込んでいる。今までずっと短髪だった髪は、もう少しで肩につきそうだ。目の前の自分は、あの日死んだ彼と、全く同じ姿をしている。自分と同じ顔の人間に拳銃を向けた時、彼は、何を思ったのだろうか。

「世界は、本当に終わるのかな」

あの日、双子の兄が語った言葉を、そのまま口に出してみた。信じてきた滅亡を疑う自分に気づいて、世界が終わるか否かを確かめるためにロシアンルーレットを決行した。双子の弟が賭けに勝った時、兄はそう語った。

「予言の通りに世界が終わるなら、弾は出ない。終わらないなら、ルーレットは当たる」

理屈は今も分からないが、彼は、どうやらそう信じていた。命を賭けたルーレットに知らないうちに勝利した弟に、弾倉を回した拳銃を渡し、兄は、銃口を自分の額に向けさせた。

「俺が死なないなら、世界は、きっと終わるんだ」

拳銃を握る弟の指を引き金にかけ、彼は目を閉じた。あの時の手の温度を、まだ覚えている。六月十日に日付が変わったばかりの夜は雨が降っていて、ひどく寒かった。兄は弟の人差し指に触れ、無理に引き金を引かせた。

「だったら、生きていける」

そのルーレットは、当たりだった。引き金をひいた自分の手は、じんじんと痺れていた。目の前の兄は、目を大きく開いたまま、後ろに倒れていった。それは自分がさっきまで眠っていたベッドで、額に穴さえ開いていなければ、まるで眠っているようだった。雨が降っていたせいか、銃声は外に響いた様子もなかった。隣の家が、激しく吠えていた。

叫んだつもりが、声が出なかった。転がるように部屋を出ると、家中が血の匂いに包まれていた。知らないうちに生きている人間がいなくなった家の中で、立っているのが自分だけになっていることに気づいて、背骨が抜き取られるような寒気を感じた。

その後のことは、よく覚えていない。気がついた時には、駅前のバスターミナルに立っていた。

兄がどんな気持ちで、家族の額に拳銃を向けたのか、一人でどれだけ考えても分からなかった。湿ったバス停の空気は重くて、どれだけ吸っても呼吸ができた気がしなかった。

落ち着こうと、携帯電話のテレビで、いつも見る朝のニュースを流していた時、不意に覚えのある名前がアナウンサーの口から漏れた。それは、自分の家で血まみれになっている三人の名前だった。氷が詰め込まれたような頭でそれを聞いていると、殺された息子として、ここにいる自分自身の名前が読み上げられていることに気づいた。親ですら見分けがつかない双子が、他人に見分けがつくわけがなかったのだ。

それを知った時、自分のこめかみに拳銃を向けることを決めた。同じ顔の自分が、同じ遺伝子を持った人間の行動をなぞることでは、彼の言葉を理解できないと思った。

だけど、きっと、ルーレットが当たるまで、理解はできないのだろう。

「やっぱり、世界は終わらないな」

目を開けて、フロントガラスに映る、弥栄と同じ顔に笑いかける。こめかみに拳銃を突きつけられたその顔は、何も答えない。だけど一つだけ分かる。誰が死んでも、何が起こっても、世界が終わるなんてことはない。

このルーレットが外れたら、雅美に一つ、謝ろう。そう考えながら、安全装置を引き上げる。拳銃の中で、ぎりぎりと言が響いた。撃鉄が、自由になるのを今か今かと待ち構えている。

理仁は、引き金を引いた。

## エンド イン ザ ワールド

<http://p.booklog.jp/book/75663>

著者：くろん

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/blackoct/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75663>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75663>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ